

第5回全国マスジド（モスク）代表者会議の記録

第5回全国マスジド（モスク）代表者会議

「日本のムスリム、食を語る」

2013年2月10日

小島 宏・店田 廣文 編

February, 2014

早稲田大学アジア・ムスリム研究所
Institute for Asian Muslim Studies
Waseda University, Tokyo, Japan

目次

目次	3
序	5
会議運営者および関連研究助成プロジェクト一覧	6
会議プログラム	7
会議録	10
ハラールについて	10
大塚マシドの活動の中での食事・食材	11
ムスリムの子供達の食環境 (ICOJ)	19
パネル・ディスカッション	30
閉会挨拶	55
写真	57

序

本報告書は2013年2月10日に早稲田大学（早稲田キャンパス）で開催された第5回全国マスジド（モスク）代表者会議「日本のムスリム、食を語る」の会議録である。第4回は東日本大震災後初めて開催されたため、震災にちなんだテーマが選ばれたが、今回はムスリムの日常生活にちなんだテーマが選ばれた。これまでは男性ムスリムが中心の会議であったが、今回は女性ムスリム（ムスリマ）にも基調講演的な話をしていただき、女性や子どもを含むムスリムのハラールな（イスラームにより許された）食生活の実態と課題を明らかにすることを目的として開催された

今回の会議は、イスラームを通じて、食を考えるという形で展開された。その上で、宗教という枠組みを超えて、食べるということが、人と人との関係性にも重要な要素になっていることや、多くの社会で、人と超越的な存在である世界各地において信仰されている神（々）との関係性を考える上で、重要な社会的行為であることが改めて、浮き彫りとなった。ムスリムと非ムスリムの参加者が一堂に会して、日本のムスリム・コミュニティの多様な側面をこれからも発信し続けることが必要であろう。本会議録がそのような目的の達成に寄与することができれば幸いである。

なお前回に引き続き、全国マスジド代表者会議直前に早稲田大学のムスリム学生特別懇談会（全国ムスリム学生代表者会議）を開催したこともあり、ムスリム学生連盟（MSAJ）の代表者や各大学のムスリム学生代表者にも参加していただくことができた。当日の参加者は、パネリストのマスジド代表者等13名、ムスリム学生11名、一般参加のムスリム8名、それ以外の参加者36名（うち関係者9名）の計68名であった。

毎年のことではあるが、会議開催にあたっては、各地域のモスク代表者の方々をはじめ、滞日ムスリムの方々、また一般参加の方々など多くの人たちから多大なご協力をいただいた。皆様に厚く御礼申し上げ、これからのご協力についても改めてお願いする次第である。なお、最後になったが、本会議録の編集についてはアジア・ムスリム研究所の招聘研究員である野田仁（イスラーム地域研究機構次席研究員）・砂井紫里（イスラーム地域研究機構研究助手）の両氏にお世話になったので、記して謝意を表する次第である。

2014年1月

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

小島 宏

店田 廣文

会議運営者一覧

(所属は2013年3月現在)

小島 宏	早稲田大学社会科学総合学術院・教授
店田 廣文	早稲田大学人間科学学術院・教授
野田 仁	早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員／研究院講師
吉村 武典	早稲田大学イスラーム地域研究機構・次席研究員、人間文化研究機構地域研究推進センター研究員
砂井 紫里	早稲田大学イスラーム地域研究機構・研究助手
岡井 宏文	早稲田大学多民族多世代社会研究所・招聘研究員

関連研究助成プロジェクト一覧

本会議および本報告書は、以下の研究助成による研究成果の一部である。

- ・早稲田大学重点領域研究「アジアにおけるムスリム・マイノリティと非ムスリム・マジョリティの共生に関する国際比較研究」研究代表者：小島 宏
- ・「人間文化研究機構（NIHU）プログラム イスラーム地域研究」（早稲田大学拠点）研究代表者：桜井 啓子
- ・平成 23～25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）・課題番号 23330170「東アジア諸国におけるムスリムと非ムスリムの共生：ライフスタイル変容の比較研究」研究代表者：小島 宏
- ・平成 24～26 年度科学研究費補助金基盤研究（C）・課題番号 24530669「滞日ムスリムに関する住民意識の3地域比較調査研究と多文化政策再考」研究代表者：店田 廣文

会議プログラム（事前に準備したもの）

早稲田大学アジア・ムスリム研究所

早稲田大学多民族・多世代社会研究所

「人間文化研究機構（N I H U）プログラム イスラーム地域研究」早稲田大学拠点

2013年2月10日（日）

於：早稲田大学・18号館国際会議場第3会議室

「日本のムスリム、食を語る」

13:30-13:40 開会の挨拶 小島宏（早稲田大学アジア・ムスリム研究所長）

13:45-14:15 「大塚マシドの活動の中での食事・食材」

永井 M. Arifin 彰氏（(宗) 日本イスラーム文化センター理事）

14:15-14:45 「ムスリムの子供達の食環境」

サバー・アーリフ氏（ICOJ 日本人部女性代表）

14:45-15:15 休憩と礼拝（14:54 サラート（ASR））

15:15-16:15 パネル・ディスカッション

司会：小島 宏

パネリスト：マシド代表者等の方々（以下、順不同）

サイド・ムガル・ベグ（アブーバクル・スイッディーク・マシド）

マリク・アマーナト・アリー（イクラア・マシド）

アキール・シディキ、ハールーン・クレイシ（大塚マシド）

アブデルファッターフ・エル・オムリ（つくばマシド）

ミアン・ムハンマド・サーディク（バーブルイスラーム・マシド）

サリフ・エゼル（岐阜ファーティフ・モスク）

ファイヤーズ・アハマド・ムガル（クバー・マシド）

スイラージュ・カマル（ダールルアルカム・マシド）

オバル・アブドゥルカーディル（徳島マシド）

ライース・スイディキ（戸田マシド）

アハマド前野直樹（ヒラー・マシド）

未定（福岡マシド）

モハメット・ナズィール（Assalam Foundation）

ジャミール・アハマド Jamil Ahmad（ICOJ, Islamic Circle Of Japan）

モハメド・エルノービ、ファディ・アルナジャル（MSAJ, Muslim Student Association Japan）

16:15-17:00 総合討論

17:00-17:10 閉会の挨拶 店田廣文（早稲田大学多民族・多世代社会研究所長）

参考：MAGHRIB 17：17 ISHA 18：29

礼拝室：18号館4階共同研究室1・2（男女別）

“Muslims in Japan talk about food issues”

Organized by Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies, Waseda University

NIHU Program Islamic Area Studies, IAS Central Office at Waseda University

Date February 10th (Sun.) 2013, 13:30-17:10

Venue Waseda University, Waseda Campus, No. 3 Conference Room, Bldg. 18

Program:

13:30-13:40 Opening Remarks

Hiroshi KOJIMA, WU Institute for Asian Muslim Studies

13:45-14:15 Presentation by Otsuka Masjid, Mr. Nagai M. Arifin Akira

14:15-14:45 Presentation by ICOJ, Sister Saba Arif

14:45-15:15 Break/Salat (ASR 14:54)

15:15-16:15 Panel Discussion Chair: Hiroshi KOJIMA

Panelists: Representatives of Masjids in Japan

Saeed Mughal Beg (Masjid Abu-Bakar Siddique)

Malik Amanat Ali (Masjid Iqra)

Aquil Siddiqui, Haroon Qureshi (Otsuka Masjid)

Abdelfatteh El Omri (Tsukuba Masjid)

Mian Muhammad Sadique (Masjid Bab-ul-Islam)

Salih Ezer (Gifu Fatih Mosque)

Fayyaz Ahmad Mughal (Masjid Quba)

Siraj Qamar (Masjid Dar al-Arqam)

Obaru Abdul Kader (Masjid Tokushima)

Raees Siddiqui (Madina Masjid, Toda)

Shaykh Ahmad Naoki Maeno (Masjid Hira)

TBA, Fukuoka Masjid

Mohamed Nazeer (Assalam Foundation)

Jamil Ahmad (ICOJ, Islamic Circle Of Japan)

Mohamed H. M. Elnoby, Fady S. K. Alnajjar (MSAJ, Muslim Student Association Japan)

16:15-17:00 General Discussion

17:00-17:10 Closing Remarks

Hirofumi TANADA, WU Institute of Multi-ethnic and Multi-generational Societies

Notes : MAGHRIB 17 : 17 ISHA 18 : 29

ROOM for Salat : Research Office No. 1 and No. 2, 4F of Bldg. 18 (separated for each gender)

Contact: Institute for Asian Muslim Studies, Waseda University

E-mail: asian-muslim@islam.waseda.ac.jp

URL: <http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/ams.html>

会議録¹

(開会の辞は録音状態不良のため割愛)

ハラールについて

小島：主として中国のハラールを研究している砂井さんにハラールについて説明していただきます。そしてその後にお二人の先生方から講演していただきたいと思います。

砂井：ただいまご紹介いただきました、早稲田大学の砂井と申します。どうぞよろしくお願いたします。私はイスラームの専門ではないのですが、食文化ということで、食べものと食事についての勉強をしております。ですので今日は食文化を学ぶ者としての立場から、本日の話題提供をさせていただきたいと思います。

私たちはどのような文化や社会、国に暮らす人にとっても、身の回りの物から特定のものだけを食べ物として選んでいるわけです。それは時代であったり、地域であったり、民族や宗教によって、共通するものもあれば、全く違うものであったりもします。文化としての食は、個人の好き嫌いとは違いますし、実際になぜそれを食べ物としているのかといったことが意識されているか、意識されていないかという違いもありますけれども、とにかく特定のものを食べ物として選んできているわけです。

みなさんもお存じのようにイスラームに関しましては、ハラールという概念がございます。ハラールは許された、シャリーアで合法のものや行為、ハラームは禁じられたもの・行為、そしてその間にシュブハ、マシュブーという疑わしいものがあります。

日本では一般に、宗教的な制約に関しては、感覚とか理解というものがやや鈍いところもありまして、食材や食べものの選択などでは、なかなか苦労されていることかと思えます。

何を食べるか、ということだけでなく、料理をしたり、実際にどのように誰と食べるのか、いったいどこで食べるのか、そういった食事のプロセスの中で、食事のあり方というのはたくさんのバリエーションがあります。その違いを、外食のレストランで楽しんだり、あるいは旅の中で楽しんだりもするわけです。えてして食事というものは、身についた、

¹ 前回と同様に、会議録については、当日の録音に基づきできるだけ内容を正確に再現するよう努めたが、なお誤りが見られることも考えられる。ご容赦いただきたい。また録音が不鮮明な箇所やアラビア語の文言については一部を省略して掲載した(省略部分は、「[...]」として示す)。ご了承いただければ幸いである。

生まれてから、育って今に至るまで身に沁みこんだことなので、かなり保守的な部分というのがあります。

そうした違いを越えて、食事というのは人と人をつなぐ、そういった行ないでもあります。共に食べるということ、食べものや食べる場を分かち合うという、そういったコミュニケーションの場でもあるわけです。どのような形で食事を共にしているのか。それによって生じてくる問題もあるでしょうし、それによって付き合いが滑らかになることもあるかと思えます。その際にはやはり、異なるやり方、慣習であるとか、そういったものに関しての理解、配慮といったものが必要になってくるかと思えます。日本で暮らしている中で、皆さんが実際に体験されている課題であるとか、その対処方法、あるいはそのやりくりですとか、そういったことについて、本日は広く意見交換をしていただけたらと思います。そしてそれについて私たちもたくさんのことを学びたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

小島：ありがとうございました。私がそういう話をする能力がないものですから、砂井さんにやっていただきました。どうもありがとうございました。

ちょっと予定より早いんですけど、永井先生にやっていただいてよろしいですか？一応30分ということで、サラートの時間はできるだけちゃんととりたいので、早めに終わるのは悪いことではないと思います。

大塚マスジドの活動の中での食事・食材

永井：アッサラームアライクムワラフマトッラーヒワバラカートゥ。みなさんこんにちは。日本中のムスリムの代表に会うことができる、こういう機会を得られることを大変うれしく思います。また本日は、大塚マスジド、宗教法人日本イスラーム文化センター、ただ本日はモスク会議ですから大塚マスジドを代表してですね、私、永井ムハンマド・アリフィンがお話しできる機会を与えてくださったことに感謝いたします。30分の時間がございますが、私の話はたぶん20分くらいで、アキール会長が来てますので、多分補足的なものをしてくれるのではないかなと期待しております。

イスラームとはですね、真実とはなんですかということ、それと人間はいかに生きべきかということの指針からなっているものです。我々現代人が、真実とみなすものに自然科学というものがあります。自然科学はイスラームのなかの一部分です。一番の真実は、

アッラーがおられるということです。アッラーには始まりも終わりもなく、在られるということでございます。アッラーはあらゆるもの、すなわち時間・空間・光・エネルギー・物質の所有者であります。森羅万象の創造主です。最も美しい、最も高度な生き物としてアッラーは人類の祖アダムを作られました。そしてイヴを作られ、アダムとイヴに子孫を増やすように命じました。人類が生まれ生きる場所として、現世が用意され、生きる糧を用意されました。そして同時に現世ではどのように生きるのが良いかという指針を与えてくださいました。

良い生き方の指針の中には、飲食してよいもの、食べてよいもの、飲んでよいもの、という、何を飲んで食べてはいけないかという掟をつくってくださいました。飲食は日々生活する上で、常につきまとうものですから、飲食にかかわる教えがあるがゆえに、ムスリムはイスラームを忘れることはほとんどありません。イスラームは常にアッラーを思いなさいという教えなわけですが、飲食に関わる教えがあるゆえに、ムスリムはアッラーを忘れることはほとんどありません。

イスラームには飲食に関わる掟があり、それは極めて具体的な内容のものであります。その一つ、イスラームでは豚肉を食べることは禁止であるということがございます。豚肉は世界で極めて身近な食材であるがゆえに、豚肉を禁止するということは、イスラームに対する違和感の原因になっていることとございましょう。ヒンドゥー教では牛肉が食べられていませんが、日本人はそれほどヒンドゥー教に違和感を感じないんじゃないかなと思うわけですが、ヒンドゥー教がほぼインド一国の宗教であり、日本人にはほとんど関わりがないということで、違和感を感じないということかもしれません。また今でこそ牛肉が一般家庭の食卓にのぼりますけれども、少し前までは牛肉は高嶺の花であって家庭には関係のない食材でしたから、牛肉を食べないことの違和感はわかかなかったということかもしれません。

次に精進料理という料理をご存知かと思えます。仏教では、僧は戒律五戒で殺生が、殺生は動物を殺すことですね、殺生が禁じられており、日本に伝わった大乘仏教では魚と肉食も禁じられたため、僧侶は、お坊さんは、野菜・穀物・穀類など植物性の食材を調理して食べたものです。お坊さんは托鉢というのも行いますけれども、そのとき市民はお坊さんに、今申し上げたような野菜・穀類・豆類などの材料ですね、料理されたものでなくそういうものを托鉢の入れ物に入れてくださいます。そうするとお坊さんは、野菜・穀類・豆類などの植物の食材を調理するというを行うわけですが、そういうものから生まれたものが精進料理であって、それは基本的には菜食ということとございます。植物

性の食べものということでございます。

それから日本の田舎では、野獣・小動物、小動物というのはウサギなどですね、や野鳥が捕えられる。田舎は、田舎の人はそれを口にする機会があるかも知れないけれども、日本のちょっと前、江戸時代とかその前を想定してください、都会ではそういう野鳥などの小動物に出会う機会はほとんど稀であって、都会人はそれを口にする機会はほとんどないゆえに、食べることに馴染まないということはあったらと思います。それから江戸幕府・五代将軍綱吉の時代になりますと「生類憐みの令」というのが出されまして、獣肉を食べることは禁止であるということではないのだけでも、なにかそういうものを食べるのは憚られると、良くないことであるというようなことが日本人の中に浸透いたしました。こうして口にしないうちに、獣肉というのは独特においがありますので、食卓から遠ざかったのであろうということが想像されます。で、明治維新になります。改革の時代、廃仏毀釈ということもあって、西洋の新しいものを取り入れるうちに、食生活も含まれて、肉食に抵抗を感じない世代がだんだんと育っていきます。ということで合理的に何でも受け入れていく日本人は、いつしか獣肉大好きな市民となっていきます。残飯とくず野菜、糠などで狭いところでも育てられる豚は、国土の狭い貧しい日本人に向けた肉であるということになったのでございましょう。そうして種々の加工食品・レストランの食べものには、豚肉や豚肉由来の油脂などが含まれるという結果が今生まれております。

その結果、豚肉・豚油脂などを食べないムスリムは日本に住むにあたってさぞかし不自由なことであろうと皆さんは解釈されるのであろうということは想像に難くありません。またムスリムの中にも食べものに関わる掟を厳しいものと感じ、とても不自由で窮屈であると思っている人はいるようにも想像できます。さらに食べてはいけないのが豚肉だけではないということになると、ここ日本でいったい何を食べるのかということになってしまいそうであります。すなわち酒・アルコールが含まれるもの、和食では味を良くするために酒、味醂を使いますし、加工食品の中には防腐剤としてアルコールを添加したものもございまして。また、発酵過程でアルコールが含まれるものもあります。肉については、禁止されているのは実は豚肉だけではありません。ムスリムが動物を殺すときにはできるだけ苦しめないように、鋭利な刃物を用いて一気に頸動脈を切るということが要求され、刃物を首にあてるときは、アッラーの御名において「ビスマッラーヒッラフマーニッラヒーム」と唱えることが要求されております。野獣が襲ったなど瀕死の動物については、まだ死んではいない、死にそうな動物については、同様の方法で殺した場合においてのみ、食肉になりえます。すでに死んでいる動物の肉は、食用には、食べるものには、ムスリムとして

は向きません。クルアーン第五章食卓章第三節の冒頭には、動物の肉について明快に述べられております。「お前たちに禁じられたものは、死肉」、死んだ肉ですね、「死んだ動物の肉、流れる血」、この流れるというのは記憶に留めてください。肉の中に血は含まれるでしょう、こういう流れないものはそれには入らないということですね。「豚肉、アッラー以外の名で唱え殺されたもの、絞め殺されたもの、撃ち殺されたもの、墜落死したもの、角で突き殺されたもの」、あくまでもこれは死んでしまったものですね、「野獣が食い残したものの、ただしこの種のものでも、お前たちが自分でそのとどめを刺したものの、」最後にまだ息があって殺したのなら、とどめを刺したこと「は別である」。また、「石壇に犠牲とされたもの」、他の宗教で犠牲とされたものですね、「くじで分配されたもの、これらは忌まわしいものである」、ということです。

次に酒ですけれども、クルアーン第五章食卓章第九十節に次のように述べられています。「お前たち信仰する者よ、まことに酒と賭矢、偶像と占いは忌み嫌われる悪魔の業である。これを避けなさい。おそらくあなたたちは成功するであろう」。

クルアーンとともにイスラームの信仰の指針となるものにハディースがあります。酒については、「預言者様（祝福と平安を）は、飲んで酔うものはすべて酒であり、酒はすべてハラームであると申された」、ということが書かれてあります。また、「酔わせて礼拝をなおざりにさせる飲みものはすべて禁ずる」、というハディースがありますから、酔わないなら飲んでもよいというのではなく、酔わせる飲み物はすべて禁止ということになります。

こうしたことに派生して、好ましくないものが含まれる加工食品、これらが原材料になっている加工食品も好ましくないと考えます。たとえば、動物性の油脂を原材料ないし原料の一部としたマーガリン・ショートニングなど、こうしたマーガリン・ショートニングなどを用いたパン・お菓子などです。また、ゼラチンのほとんどは牛・豚の骨から抽出されますから、これも好ましくありません。なお上にあげたクルアーン第五章食卓章第三節の後半は、次のように締めくくられております。「今日、我はお前たちのためにお前たちの宗教を完成し、またお前たちに対する私の恩恵を全うし、お前たちのための教えとしてイスラームを選んだのである。しかし罪を犯す意図なく、飢えに迫られた者には、本当にアッラーは寛容で慈悲深くあられる」。この章節に罪を犯す意図なく飢えに迫られた者には本当にアッラーは寛容であるということが書かれていますが、意図的ではなくて、まことに本当に飢えに迫られてという事情に、そういうことに遭遇し、それでやむをえなく禁じられたものを口にする場合には、慈悲深く寛容なアッラーは許してくださるということでございます。

ではムスリムは食べものをどのようにして選択するのか、ということになりますけれども、以上述べたように、現在の日本では、食べものに関する禁忌、タブーですね、がほとんど存在しませんから、一般の日本人から見ればムスリムは食べものに関しとても、不自由であろうと思われていることでしょう。ただ、米・小麦粉・塩・砂糖・香辛料・野菜・果物を含む植物・魚があれば、イスラームの教えにかなう料理を種々作ることが可能です。東京であれば新大久保、東京および各地のマスジドの近くには、ハラールショップというものがあり、イスラームにかなった内外の精肉、お肉になったものですね、輸入されたハラール食材、加工食品が売られていますから、魚料理に限らず、肉料理も調理が可能です。また近所にハラールショップが見つからないならば、通信販売でハラールに、イスラームにかなった食材食品を入手することが可能です。すなわち、自らがハラールの料理を心がけようと思えば、食材を揃えることができます。香辛料についてもハラールショップで手に入りますから、本格的な味付けのパキスタン料理であるとか、スリランカの料理であるとか、そういうものを作ることは容易いこととございます。日本の料理については、アレルギーの関係で加工食品の原材料表示が相当詳細にわたっております。それを参考にすれば、イスラームにかなった醤油・味噌・酢・その他の調味料の入手が可能ですし、お煎餅などの加工食品の入手も可能です。また、加工食品の包装に記載されているお客様相談センターに電話して、原材料について問い合わせますと、とても親切に対応して、いろいろと教えてくださいます。さらに、酒や味醂を使わなくても、日本食の味付けで調理することは可能ですから、十分においしい親子どんぶりであるとかですね、すき焼き、てんぷらそば、寿司、筑前炊きとかそういうものを作る事が可能であります。

では大塚マスジドでどう料理しているのか、ということになります。高名なアン・ヌウマーン・ブン・バシール師（平安を）は、アッラーの使徒（祝福と平安を）が次のように語ったと伝えています。「ハラール事項は明白である。またハラーム、禁じられているものや行為、事項もこれまた明白である。そしてこれら2つの間には、多くの人々がどちらともはっきりと区別できない疑わしい部分がある。ゆえにその疑わしい部分を恐れ、用心して避けるものは、彼の宗教と名誉を守ったことになる。一方、その疑わしい部分にのめりこんだものは、ハラームを犯したことになる」というのがございます。敬虔な者はハラールを求めます。大塚マスジドに出入りする人々は、ほとんどが敬虔な人々です。大塚マスジドには少数だけ寝泊りしている人々がおりますし、毎土曜日には勉強会があり、夕食を提供しますから、毎日料理をしているということになります。またラマダーン月には、夕食と早朝の食事を希望する者に提供しています。それらを料理するのは敬虔な人たちです

から、イスラームにかなった食材を入手し、料理します。ハラールかどうかははっきりしない食材を用いて料理するという事は、少なくとも大塚マスジドではありえません。むしろハラールではないものが紛れ込むということの方が難しいことです。その同じ人たちが東日本大震災被災者への炊き出しを行いましたから、イスラームにかなった調理を行い提供する結果となりました。なぜならそれは敬虔なムスリムにとっては簡単なことだからです。インスタントラーメン他の救援物資については、ムスリムの仲間たちの中のそうした商品を普段から扱っている人たちが協力し調達しましたから、すべてはハラールでした。すなわちハラールのものを集めるのが一番易しかったから、救援物資もハラールのものになったということでございます。

次に外食について述べます。外食をするときには敬虔な人たちは、あえてハラールのレストランを選びます。日本食を食べたいときにはどうするのか。自宅で調理する場合の原材料にもついて言えることですが、外食のときにハラールを守るためにどうするのかということについては、敬虔さの温度差によって各自が判断するとしか申し上げられません。この日本でハラール料理を外食に求めるなんてできっこないと開き直る人もないわけではありません。ハラールに関する個人の温度差があり、どこのレストランをどのようにして選ぶかは各人が決めることとなりますが、ハラールという点でレストランを以下のように分類することができるかと思えます。一つはハラールとはっきりしているレストランで、しかもお酒を置いていない。二番目、ハラールとはっきりしているレストランだが、日本人の客を失わないためにお酒を置いている。この二つについては、パキスタンの料理と関わっているレストランのほとんどがこの二つのどちらかになります。その他でもですね、中華料理であるとか韓国料理、その他のレストランで経営者が敬虔なムスリムであるものもございます。ですから中華料理のハラールのレストランや韓国料理のハラールのレストランも探せばあります。三番目、レストランとしてはハラールではないが、メニューにハラールを表示してある、そういう選択ができる、そういうレストランがございます。インドネシア料理のレストランのほとんどがこれではないかなと思えます。四番目、豚肉でさえなければハラールであると主張する、そう思い込んでいるそういうレストランもございます。それから五番目として、今後は日本食になりますけども、寿司屋などの日本食レストランで、経営者側にはハラールとかハラームとかいう認識が全くない。そうすると我々お店に入った人間が、料理を選ぶときにどうするかということになりますが、そうしたときにメニューをみてハラールでありそうなものを選ぶということになるのですけども、さらに敬虔な人であれば、自分たちが食べられないもの、好ましい食べものはどういうもの

であるかを店員に説明して、ハラールの料理を特別に用意してもらおうということが可能であらうと思います。これが外食の問題ですね。

今度は敬虔なムスリムが、ムスリムを食事に招待するときはどうするのか。ムスリムの友に食べものを差し上げる、できたものを差し上げる、ムスリムの友達を食事のために自宅に招待する、ムスリムの友達を外食に誘う。こうしたときには、敬虔なムスリムはハラールの食べものを責任もって用意しようとしています。さて、大塚 Masjid の関係者が外国からイスラーム教徒を食事に招待したことがあります。一度は大塚 Masjid の中を食事の会場としましたから、Masjid の台所で調理し、一部は信頼できるレストランから取り寄せ、また一部の料理は関係者の自宅で作って持ち寄ったということで、ハラールという点で申し分ない接待ができました。

さて、その外国からの来訪者ですね、せっかく日本に来たのだから、お寿司屋さんかどこかで本格的なものを食べたいな、日本的なものを食べたいな、と希望した。それから大塚 Masjid の関係者にしても、せっかく日本に来たのだから、寿司屋か天ぷら屋かそういう日本的な店構えのレストランに案内したいなと思ったわけです。で、大塚 Masjid の近くの寿司屋さんで原材料について尋ねました。ところがとんでもないことがわかったんですね。寿司飯、お寿司のごはんというのは酢を混ぜます。その寿司飯を作るのに、合わせ酢を使っているというのです。そのお寿司屋さんが言うにはですね、すなわち、酢飯に酢、だし汁、砂糖、塩をほどよく混ぜ合わせてある、そうやって合わせ酢というすでに作られたもの、そういうものを仕入れて使っているのですね。たとえばアルコールが添加されているかもしれない。というのは、醤油や合わせ酢には防腐剤としてアルコールが添加されているということがよくございます。その合わせ酢の瓶を見せてもらいますと、ラベルの成分表にアルコールが明記されていました。それで仕方なしに他の、JR の大塚駅の Masjid の近くにある、他の 4 軒の寿司屋にも同様に参りましたが、いずれもアルコールが添加されている合わせ酢が使われていることがわかりました。そこで相談された私は、我が家の近所に、我が家の近所って実はこの辺なんですけども、フィリピン出身の肝っ玉母さんがやっている寿司屋さんがございます。外人さんであるから、こういう相談にはのってくれるかもしれないなと思いついてですね、そのフィリピン出身の肝っ玉母さんのところに尋ねていきました。実はその旦那さんがですね、築地でマグロの卸をやっている人で、ネタの魚は新鮮でございます。で、そのお寿司屋さんへ参りまして聞いてみると、やっぱり合わせ酢を使っていますということなんです。それならば、その肝っ玉母さん曰く、酢と醤油と味噌、そういうものを持ってきたらそれを使って料理してあげましょうと

いうんですね。お客を招待する当日、約束の時間までに私がいつも家で使っている添加物の入っていない酢、醤油、味噌などを届けてですね、そして大塚マシドの関係者は安心して外国からのお客様を寿司屋で接待することができました、ということでございます。

非ムスリムの友人とレストランを利用する場合の例を挙げてみましょう。メニューの中の料理で、たとえば天ぷら定食が一番この店ではハラールに近いだろうなと検討をつけます。そのうえで店員さんに、天つゆにアルコールが入っていますかということを知りたくですね。もし入っていそうだったら、天つゆいらぬよ、塩で結構ですよと、塩つけて天ぷら食べますよ、ということをお知らせするわけですね。それから味噌汁にアルコールが入っている可能性があるだろうから、味噌汁なしでいいですよと、お茶さえあればいいですよ。それからデザートにはゼラチンなんか入っていない方がいいなということをお知らせするわけですね。その結果ですね、ようするに白いごはんとか天ぷらと塩があれば十分に我々満足できるよということになります。ただそのときにもですね、お店側が気を利かせてくれて、もしゼラチンのデザートがセットにされているのなら、代わりにリンゴを二切れぐらい付けてくれるとか、お店もそれなりに工夫してくれるという対応をしてくれます。

日本でハラールへの理解を広めていこうとするのなら、我々ムスリムがその都度レストランにお願いするということだと思います。ハラールについて、一人が要求してくると変な客が来たなと思われるかもしれないけれども、同じような要求をする人がたくさんであればですね、お店の方は変な客では済まされなくなる。なんかそういうものがあるんだな、こういう客にも対応せないかな、ということをお店の方でも考えてくれるんじゃないかなと思われるわけですね。日本に住むムスリムたちはレストランでは積極的にハラールの要求をしてみる。ハラールに対する理解を促進する近道がそこにはあるんじゃないかなということになります。日本ではハラールなんて無理なんだと思わずに、レストランでハラールの料理を提供するように要求してみるということで、一歩を踏み出してみるのには、我々ムスリムとして大事なんじゃないかなということになります。

それから今の日本では、特に東京やマシドが近所にある町では、ハラール食材の入手は困難ではありません。通信販売も考慮に入れば、日本中でハラール食材を入手できます。イスラームは知識を得たら、すなわち教えを知ったら、少しでもできることから実践していこうという教えですから、身近な食べることからできることを実行していくということが、我々ムスリムとして大事なことはないかなということになります。

次にですね、東日本大震災の折に救援物資を届けたり、炊き出しをしたという話を去年しましたけれども、国の対外援助の食糧というのはヴィーガン、ヴィーガンってご存知だと

思いますけれど、これは完全な菜食です。ようするに、ベジタリアンというのは、ときにハチミツだとかそれから牛乳、そういうものも認めるということでございます。しかしヴィーガンというのはそれもだめという、全くの植物食です。私は、援助物資はハラールというのだけれど、それはまだ世界中では通用しないのですね。ですから申し上げますけれども、ムスリムが多い国・地域、ヒンズー教・仏教が分布する国・地域でも災害というのは起こります。カンパンだとかビスケットだとか炊き込みごはんとか、あらゆる援助用の非常食をヴィーガンで加工されているならば、世界中のいずれこの国・地域に対しても同じものを使うことができます。ヴィーガンの食事を加工することは特段大変なことではないと思います。ヴィーガンで加工した食品は、ハラールの認証を受け、急成長し、人口も多いイスラーム圏に輸出することもできるだろうと私は思います。イスラーム圏を加工食品の輸出先にしたいという企業が今増えつつありますから、ヴィーガンで加工食品を作るとは、このグローバルの時代に日本で研究に値する事柄であろうと思いますし、国の対外援助の食糧はヴィーガンに統一するというに我々はそろそろ目を向けていいんじゃないかなと思う次第でございます。以上でございます。

小島：

アキール会長、補足はありますか？

アキール：

かなりよくやってくれたので。

ムスリムの子供達の食環境

小島：

それではさっそく、ちょっと早いんですが、サバー・アーリフ先生にお願いします。

みなさんすでにお手元にあると思いますけれど、ムスリムの子供たちの食環境という一枚の紙が配られていると思います。ない場合はちょっと受付にお声がけください。

サバー・アーリフ：

はじめまして。イスラミックサークルオブジャパンの日本人女性の方の今年度の代表を

しています藤岡と申します。ムスリム名はサバーと申します。サバー・アーリフのアーリフというのは主人の名前なので、同じような名前の方がいらっしゃるので、区別するのにサバー・アーリフと名乗っております。

ムスリムの子供たちの食環境というお話をさせていただきます。子供たち、私の子供や、私の友達の子供のお子さん方の例についてお話します。日本中の全ムスリム家庭の調査報告・調査結果というものではなくて、本当に知っている限りのこととお話しすることなので、これ以外の例もでてくるとは思います。ただ話を皆さんに聞いていると、だいたい「やっぱりそうだよね」といった話が多いので、だいたいこういう感じの例が多いと思います。

食環境ということなんですが、これはどういうメニューを食べているかという話ではなくて、どういうものを選択し食べているかということになります。今まで永井先生のほうのお話と重複することもあるんですけども、イスラーム、ムスリムの食事となると、ハラールとハラームの問題が出てきますが、私の話の中ではその線引きはしません。これはハラールです、これはハラームですという線引きは、それぞれそれぞれのご家庭で若干、「私たちはここまで大丈夫」、でも他の家では「うちはここまで大丈夫」と、ちょっとばらつきがあるので、それについてはお話しません。

では順にお話させていただきます。家庭での食べもの、家庭といっても、家の中というよりは、家族で食べたり、もちろん家の中でのものもあるんですけど、うちの中で食べるお菓子とか、買って来た物とか、家族での外出先での外食に関してです。だいたい知人から情報を得て、「これは食べられるよ」という情報を得ます。たとえば「どどこか会社のなになにっていう商品は食べられるよ」とか、「前は会社のこの商品、食べられたけど今はだめなんだよ」とか、「どどこのお店で仕入れているなんとかって商品は食べられるからどう？おいしいよ」とか、そういう情報をお互いに交換したりします。

外国人の方、日本語が読めない方、来て間もない外国人の方とかは、次回自分で購入できるように、一緒に会って「これは？」「そうそう食べられるよ」ってなったお菓子とか食品のパッケージとか名前を憶えておいて、次回、それを購入できるようにする方もいらっしゃいます。

材料をチェックする、自分とか家族とか身近にいる人に日本語を読める人がいる場合には、「お店でこれこれ食べたいな」と思って、パッと裏返して原材料を見てチェックして、「ああこれ大丈夫だ、食べられる」ということで、食べたりもしています。最初、私これは日本だけかなと思っていたのですね。例えばアメリカとかイギリスだと結構ムスリムの

方が多くて、そういうもの配慮している地域とかもあるので、ムスリム・タウンもありますので、結構こういうのは日本くらいなのかなと思ったんですけど、実はそうではなくて、私の甥っ子はパキスタン育ちのパキスタン人なんですけれど、イギリスに留学したときに、やっぱりそれをやっていたそうです。もちろんハラールも、ムスリムのコミュニティが大きいもので、結構自由に食べられるところもあったんですけど、普通のお店に入って、ああこれ食べたいなと思ったときに、パッと持って原材料をとっているのをやっていたので、パキスタンに戻ったときもそれが癖になって、パキスタンで作った大丈夫なやつなのに持ってヒュッて見てしまって、「なんか僕もう癖になっちゃった」って言っていたことがあります。

原材料がわからない場合、たとえば大きな徳用の袋に入っているお菓子ありますよね、ビスケットとか。ああいうので、「はいどうぞ」って、原材料が書いてある紙じゃなくて渡されちゃったもの、地元のお店が作っている和菓子とか洋菓子屋さんで原材料がチェックできないお菓子は、バスマラ、ビスミッターヒラフマーニラヒームとか、これは食べるものの場合いつも言うんですけど、バスマラを唱えて食べるというのを、私はいつも大丈夫だと思うから食べちゃうんですよ。バスマラを唱えて食べる人もいます。「私はちょっとそのまま食べるのは気が引けるので、気が向かないので、ちょっと問い合わせしてそれから食べる」といって、問い合わせをしてOKだったら食べるという人もいます。あとはそういうプロセス自体が大変で、「もういいや私はこれわからないからあげちゃうわ」といってムスリムではない人にあげてしまう方もいらっしゃいます。

あと永井先生の方でもお話があったんですけど、外食に行ったときにお肉が入っているメニューがあったときには、お店の人に交渉して「すみません、このメニューの中からお肉を抜いて調理していただけますか」とお話しして、「大丈夫ですよ」と言っていたらお肉を抜いて調理してくださいというふうに、食べている方もいらっしゃいます。ひとつ、ムスリム食環境の悩みというのを最後に出すんですけど、ここでちょっとお話ししておきたいのが、肉抜きのお食事というのを、たとえば完成したグラタンとかからベーコンを抜けばいいんだよねって思ってたんですけど、たとえば「うちは食事制限があるので肉だめなんです。これ大丈夫ですか」と言ったときに、メニューの中にベーコンとかハムとかウィンナーが入っていても、それをお肉じゃないっていうふうに思ってるお店の方もいらっしゃるんですよ。それで「大丈夫ですよ」と言われたら、「これベーコン入ってるじゃないですか」と言ったら、「いやお肉は入ってませんよ」といって。私自身それが起こったのと、この前話していたら「私もあった」「私

もあった」というふうに言われたので、そういう経験があると、「私、食事制限があつてお肉がだめなんです」ではすまなくて、「お肉がだめでベーコンがだめでハムがだめでウインナーがだめなんですよね」というふうにわーっと言って、これがないものを、「私が欲しいこのメニューにはそれは入ってませんか」と言って、「はい入っていません」と言われたら「じゃあこれをお願いします」と、「これにはベーコン入ってます」と言われたら「じゃあすみません、抜けますか」というふうに交渉したりする人もいます。

次に給食は、だいたい3パターンに分かれます。完全にお弁当持参で給食を食べない子。学校の給食を食べるんだけど、その中に食べられないものがあつた場合には家から代わりになるもの、似たようなものを待ってきて食べる子。あとは代わりになるもの、お弁当を持ってこずに学校で出るものの中で食べられるものだけ選択して食べて、足りない分は家に帰ってから食べましょうという子。これは少数派なんですけど、いるそうです。こういう給食に関しては地域とか学校によつても結構差がありまして、アレルギーの子のためにアレルギー対応食を用意しているような学校では、「うちもそれをお願いします」ということでムスリムの子が同じようにアレルギー対応食を用意してもらっているというお宅があります。あとはこれ結果がどうなったかわからないんですけど、交渉してみたら、そういうムスリムの子のための肉とかいろんなものを抜いた食事が必要だつていうニーズがそれなりに確保できたら、ムスリムの子のために代替食を準備してあげましょうという話を、学校というか業者のほうから言われて、じゃあこれから集めますというふうにおっしゃっていた方もいらっしゃいます。ちょっとその結果がどうなったのかわからないんですけども、行政などの方ではそういう機運があるところもあるようです。

学校に行くようになって、私の友人の話なんですけれども、そのお宅は学校の給食も食べてお弁当も持っていくという家だったんですけど、そういうふうには食べられないものがあるんですよとお話ししたところ、学校というか、地域によってそれぞれの地域の給食センターが学校に渡すところと、学校の中の給食室で全部作つてその学校の中で消費するところとあるんですけども、そのお子さんのところは献立をたぶん学校で作っている、学校自身が決められるような学校だったんですけど、できるだけムスリムも食べられるような献立が増えていったそうです。全部食べられるつていうわけじゃないんですけど、そこそこ考えてくださつて、たとえばさっき永井先生の方からも出てきたんですけど、ゼラチンとかがやっぱり食べられないというので、ゼラチンを寒天に替えてくれたとか、あと魚とかが増えたとか、という例もあるそうです。

少数派ということで、お弁当を持たずに学校の給食の食べられるものだけで対応すると

いうおうちがあったんですけれど、学校も「それどうですか。栄養とか大丈夫ですか」っていう話になったそうなんですけれど、「いや家に帰ったらちゃんとそれなりのものを食べさせているんで大丈夫です」っていうことで、親の方では「それでいいです」ということだったので、学校側も「そうですか。ならそれでいいです」というふうになったそうです。

食べられるか食べられないか、毎日のメニューの中でどれを食べられるのかということとは、結構話を聞いていると、学校とか保育園・幼稚園の方でチェックしてくれるようなところが多いそうです。先生のところには「誰々ちゃんのところにこの献立表を渡してください」とチェックが入っていたり、一か月に一回、栄養士さんとお話し合いをして一か月の中でだめなものを「ここだめね」「これはじゃあ持ってきてください」というふうにし話し合いができるような環境のところもあります。実はうちの子供たちが行っていたところが東京で、そうだったんですけど、今は福島にいまして福島の学校では、「以前いた東京の学校ではこうだったんですよ。一か月に一回、栄養士さんとお話ししてたんですけど」とお伝えしたんですけど、福島の学校では、うちの子が行ったところでは、「ちょっとそれは難しいですね」と言われまして、私はそれはそれで、わからない部分は私の場合はいいやと思ってたもので、みなさん日本人の方には古い話になっちゃうんですけども、献立今日はこれが出ますという横に主な食材とかって出てるんですよ。そこでお肉が載っているかどうかチェックするのと、あとは自分のカンで「あ、これ洋風スープって書いてあるからちょっとあぶないな」といって、それをうちの方で作って渡したり、食べられるかもしれないけれど、知らないから持たせるねというふうに持たせたりして対応してました。私の場合は。

次に給食以外の学校行事のとき、たとえば何泊かする旅行とか合宿などの校外の宿泊行事のときには、いろんな話を聞いていたんですけれど、結構協力的な担任の先生とか旅行の担当の先生とかが多いようで、「こちらはこういうことで食事の面でちょっと心配なんですよね。チェックしていただけますか」って言ったり、言う前からもあるんですけど、先生の方で大雑把にチェックして下さって、万が一のために、何か食べられないものがあったりしたら、とりあえず持たせていいですかって言って、ふりかけを持たせたり、ごはんがあればこれで食べられますからってふりかけ渡したり、インスタントスープとか、レトルトで自然食品のお店とかで食べられるものとかもあるんで、それを持たせて、それががんばってきなさいというケースになります。

先生の方で、それではなくてできるだけ楽しんでくれということで、先生が全部細かく、第一日目のどこどこではこれが出てくるんでこれが食べられないから、そのお店なりレス

トランに行って3年1組の人数30人なんですけれど、一人分だけここのお肉を抜いてくださいと、それぞれにお願いして、ムスリムの子の分だけお肉とかいろんなものを抜いた状態で提供してもらおう、という例もありました。

さっき大雑把に先生にチェックしてもらおうという話をしたんですけど、全部食べられなくてもいいんですよ。結構子供たちって一緒に食べたい、もちろん同じものを食べたいなんですけれど、一緒にいるだけでもうれしいというのもあるんで、何日目のどこどこはビュッフェですと、じゃあうちは主食になるものがあればうちはOKですっていう家だったら、食べられるものはこれだからこれを食べなさいとか、皆の様子を見て食べられそうなものを食べなさいというふうに、親の方から言って対応したということもあります。

臨海学校の飯盒炊爨など、グループごとで作ることもあるんですけども、その場合はグループ作るときって友達とかの親しい仲間が多いもので、グループの子が合わせてくれて、肉以外のメニューで飯盒炊爨をしようということで、理解してくれて、それで食べるというお話もありました。

校内で全体で食べるもの、たとえば幼稚園とか小学校で収穫祭というものがあるんですけど、畑で採れたものでおつゆとか作りましようとか、お祭りとかでみんなに提供する豚汁とか、そういうものは、もう一回の食事だから食べなくていいよっていう家もありますし、そういうのがあるんだったらうちは自分の物を持たせますからって持参したりしているようです。

他にも子供たちいろいろあって、食べものに関してのいろんな支障があるんですけど、家庭科の調理実習が小学校大きくなったり、中学校・高校になると出てくるんですが、これはやっぱり話を聞いてみると、大概の子がもう周りの子がわかってるんで、じゃあ野菜を切る担当になるとか、野菜を切るだけじゃなくて汚れた器材、お箸とかお玉とかそういうものを洗う係になって参加して、肉抜きメニューを食べたりする。たとえば試食のときにスパゲティミートソースとサラダ、というときにはじゃあサラダとミートソースのかかっていないパスタの部分を食べるっていうふうに過ごしているそうです。先生からの提案で、「あなたこのメニュー食べられないから別のコンロで自分の分作ってね」っていうふうに言ってもらって、自分のものを別に作るっていうケースもあるそうです。たとえば私が聞いた話では、ある子が、豚の生姜焼きを作るということになってこれは無理だなと思っていたら、先生の方から「あなたじゃあ先生のところのコンロ空いてるからあそこで塩鮭焼いてね」って言われて、そこで塩鮭焼いて食べたっていう例があるそうです。これはゆとり教育のおかげなのかもしれないですけど、ある子は、ある子といっても何人かいる

んですが、今まで食べられるものしか作ったことがないっていう子もいました。たとえば、サラダしか作ったことないとか、サンドイッチで卵サンドとツナサンドを作りましたとか、野菜サンド作りましたとか、そういう感じでお肉関係の問題、どうしようと思ったことがないっていうケースもありました。

今まで家庭とか学校の話だったんですが、友達との付き合いの中でだんだん大きくなってくると、子供同士で出かけて、その出かけ先で、お腹空いたからどっかで食べようってことがでてくるんですけども、友達との付き合いで外出先で食べる場合、皆どうしていませんかっていう話を聞きました。一緒に外出する友達っていうのはもう自分のことを分かってくれている友達が多いので、「お腹空いたね。じゃあ食べられないものばかりの、たとえばハンバーガー屋さんじゃなくて、その隣のお店はいろいろあるからそっちに入ろう」とかっていうふうに、協力的になってくれる友達がいるんで、肉以外のメニューも置いてあるお店に入ったりする子がいます。あと、そういう状況じゃなくても、「何も食べられない、この店に入ったら僕食べるものがない、という場合でも、一緒に友達といるだけでうれしいから、自分は飲み物だけで友達にご飯食べてても全然関係ない」って、一緒にそのお店に入って自分は飲み物とデザートで済ますっていう子もいます。実はうちの息子の話ですが、中学校の卒業謝恩会のときに、子供たちと担任の先生だけで謝恩会したんですけど、そのときになぜか謝恩会の会場が焼肉屋さんで焼肉食べ放題コースだったんですね。「どうすんの？」ってきいたら「俺はもう飲み物と白いごはんとデザートだけで全然平気だよ。一緒にいたいんだ、いれればもういいから」って言って、皆は3000円コースだったのをうちは2000円弱にしてもらって、ごはんと飲み物の飲み放題とデザートで3時間過ごしてきました。帰ってきたら楽しかったと言って喜んでました。

ムスリムの食環境の悩みなんですけど、ムスリムの方々の話とかで分かるかもしれないんですけど、友達と気軽に同じものが食べられない。やっぱり今まで話してきたことの中に出てきたことなんですけど、同じものが食べられない。食べられないって、だからムスリムやめたいと思う子は私がみてきたところほとんどいません。食べられないな、辛いなって思うくらいなんですけど、やっぱり辛いと思うことが多いです。まあ大きな子は、「僕はムスリムだから」「辛いけど僕はムスリムだから、それでいい」と思ってる子が多いんですけど、そういうことがわからない小さい子、幼稚園いったかくらいの子だと「目の前の子は食べているのになんで私食べられないの」って、親の方で理解させるのがちょっと大変なときがあります。

あとは入れる理由がわからない商品にまで肉エキスが入っていることがあるんですね。

ごめんなさい。私達うの読んで書いてないかも知れないんですけど、たとえば煎餅とかうどんのつゆとかインスタントの野菜の味噌汁とかに入ってることがあるんですね、肉系のものが。結構、外国人のお母さんたち、日本語が読めないムスリマのお母さんたちの中で、日本に来て皆から教えてもらって、煎餅っていうのはお米とお醤油と塩くらいしか入ってないから、何食べてもお煎餅だったら 100%ハラールだよって言われて、喜んで、お米だからごはん食べないでお菓子ばかり食べてる子でも、これだったらお米だからちゃんと主食とれるからいいって喜んでお煎餅を買ってるお母さんがいたんですけど、実は最近、肉エキスが入ってるお煎餅が結構、どのくらいの割合だかはわからないんですけど、出回ってまして。あるとき、私の目の前であったんですけども、モスクで「じゃあ私持ってきたからあげるよ」ってお母さんが皆にお煎餅を渡したんですけど、実はそれ肉エキスが入ってたやつだってわからなくて渡したんですね。「お母さん、それ肉エキス入ってるからだめよ」って言ったらすごいショック受けて。「え、食べれると思ったのに。食べれるって言われてたの。お煎餅は食べれるって言われてたから、これを買って食べてたのよ」ってすごくショック受けてたんですね。ということで、なぜ入ってるんだろうっていうものにも肉エキスが入ってるのは、ちょっと悩みです。

「給食のケーキが食べられない」って書いてあるんですけど、子供たちで給食食べられなくても、って思う子でもケーキは別腹で、給食費は払ってなくて自分のお弁当だけ持っていったる子も、「ああ、今日はケーキだったのか。食べたかったな」って思ったり、給食費を払って食べてられるものはもらって食べてるという子でも、たとえばゼラチンのケーキ、レアチーズケーキとか危ないものなんですけど、そういうのが出ていると「はあ、そうかゼラチンだったのか。食べられるケーキなら食べたかったな」というように思うのが、子供の悩みだそうです。

話の順番で逆になってしまうのですが、「なんで食べられないんですか？わがままじゃないですか？」とか「なんでみんなと同じものが食べられないんですか？」とかって言われたり、逆に「食べられないのはすごいかわいそうね。何で食べられないの？」というふうに言われる。そういうふうに理解してもらえないのが辛いつてことがあります。

この前、聞いてショックだったのは、あるお宅が、以前いたところでは完全お弁当でいって、転校した先でも完全お弁当でお願いしますという話で先生の方で了解してもらったんですけど、給食費の話になったときに先生、というか校長先生だったらいいんですけど話したのは、「いやあお父さん、あなたのお子さんはみんなは給食食べてるのに、お弁当自分のものを持ってきてみんなと一緒に同じところで食べてるだけでも特別扱いなんです

よ。それで給食費を払えないんだったらば、お弁当を持って学校の中で一人で好きなところで食べてください」って言われたそうです。15年前、だいたい娘が小学校入るくらいのとき、これに近い例は何個か聞いて、それ以来ずっと聞いてなかったの、いい社会になったな、いい教育環境になったなって思ってたんですけど、これをちょっと前に話をうかがってすごくショックでした。ムスリムとして主張したいというわけじゃなくて、理解されてないんだなっていうのがショックでした。

それで15年前の話なんですけれど、理解してもらえないということで、あるお子さんは、小学校は公立だったらふつう自分の学区内の学校に行くんですけど、「今度新入生で入ります。よろしくお願ひします。それでうちの子こうこうこうでお弁当もたせますけども...」って話をしたらば、「なんでそんなわがまま言うんですか？うちの学校にはそういう子は通わせません」って拒否されたそうです。それでそのお宅はしょうがないから次の学校にいったってその話をしたらそこでも「だめです」って言われて、3校目の学校に行って「わかりました」ということで了解を得て3校目の学校に通学したそうです。

あともうひとつ、特異な例なんですけれど、国際結婚されたお宅でお母さんが日本人で大きくなってから入信された方なんですけれど、そのお宅がやっぱり「うちの子はこうこうこうでお弁当もたせます」とか「こうこうこうで給食は同じものを食べられません」という話をしたら、「うちの学校には前からムスリムの子はいますよ。でもその子はみんなと同じように全部食べてますよ。あなたのお宅はわがままですわね」って言われたそうなんですよ。本当に一部地域の一部の人たちなんですけれど、海外に出たら、海外というか自分たちのコミュニティの外でムスリムじゃない地域に行くと、もうしょうがないから豚でも食べていいっていう、豚だけじゃなくていろいろあるんですけど、豚でもなんでも食べていいっていうことで、なんでもOKって食べている人たちがいて、ちょうどその行った学区の学校のお子さんにそういうご両親のお子さんがいてその子は食べてたんで、「あそこはムスリムの家庭なのに食べてるよ。あなたは日本人でもともとムスリムじゃなかったのに、なんでそういうことを言うんですか。わがままですわね」って言われたそうなんです。そこは結局その学校に通ったんだかどうかかわからないんですけど、そういうふうに言われたということがあります。

食べられないのがかわいそうっていうこととお話しうかがったのは、お母さんが日本人の方で国際結婚されてお子さんがいるっていうお宅で、かわいそうだっていうことで親切心から言ったんでしょけれども、親族の方、だから日本側のおじいちゃんおばあちゃんとかおじさんおばさんだと思うんですけども、ムスリムじゃない親族の方がお子さんに、

小さいお子さんなんですけれど、「早く大人になって、宗教かえたらいいんじゃない。そうしたら自由に食べたいものが食べられるよ」って言われて、お子さんの方は「あ、そうか」って思ってしまっただけなんです。それを知ってお母さん、というかご両親が「そうじゃなくて、あなたはムスリムでこうなんだから、それは違う話なんだよ」って言ったんですけれど、ちょっとわかってくれたか微妙だっというお話をうかがいました。これ、やっぱり、永井先生の方でもちょっとお話があったんですけれど、ムスリムと食ってというか、ムスリム＝ハラール・ハラームがある、食べられないものがあるっていうふうになってしまうんですけれど、ムスリムの目標っていうのは結局アッラーの存在を信じて、アッラーの喜んでくださること、アッラーがやりなさいって言ったことをがんばってやるっていうことが目標であって、私たちはムスリムで、私たちムスリムの目標はハラールを食べる、ではないですね。ダイレクトに。そこにいくまでにアッラーを信じるってことがあるんですけど、それが理解してもらえないことで、そういう、「かわいそうね。じゃあムスリムやめちゃいなさい」っていうことを思われてしまうことが、周りに思われてしまうところいろいろ問題が起きたという話があります。

今日は大学生の方が多いうかがってたんですけれども、身内というかムスリムの方が多いので、まとめ書いてきたんですけれど、ちょっとずれてしまうかもしれないんですけれども、大学生の方とかこれから結婚される方とかは、教職として教師になられたり、結婚されて誰々のパパ、誰々のママになったりするんですけれども、そのときに受け持ちのクラスや自分の子供の友達にムスリムの子がいるということが起こり得るんです。そのときをお願いしたいというか、お願いしたいことが、今話したようなこういう状況……あ！その前にもう一つ話すことがあった！忘れてた！長くなってるな、たぶん。大丈夫ですか？よかったです。

理解してもらえないという、理解してもらえないのが辛いという話をしていたのですが、逆に、その反面、他人に気を使わせるのが申し訳ないというのもあるんですね。理解してもらってすごく配慮してもらえるのはうれしいんですけど、でもすごく手間をかけさせてしまって申し訳ないっていう気持ちをもってる人が多いようです。あと、ある子が教えてくれたのが、その子が通ってる高校がお菓子持ち込み OK の高校で、あるときに「お腹すいたな」ってぽつっと言ったら友達が「じゃあこれもってるからあげるよ」って言ったのが、食べれないものだったらしいんです。その子は見て「あ！これ食べられないやつだ」ってわかったんだけど「ごめんね。これ食べられないんだ。食べないわ」って言ったんだけど、言いつつも「親切心で言ってくれたのに、拒否してしまって悪いな」って思ったそうです。

それを断るのがすごく辛いつて言っていました。

で、すいません。前後してしまうんですけれども、そういうふうみなさんの環境の中でムスリムの子が、お子さんのお友達としていたり、先生になってクラスの中にムスリムの子がいるということがあると思うんですけれど、そのときをお願いしたいことは、その子に対して「食事制限があるんだね。がんばれよ」って理解していただくことが、第一をお願いしたいことです。あともう一つ、じゃあ理解してその子のために配慮しようっていうときにもその子がパーフェクトになんでも食べられる環境を作ってほしいっていうふうに思っていないんですよね。食べるものがあればいいやとかっていう子が結構多いんですね。なので、できる範囲の中で、その子に全部合わせるんじゃなくて、できる範囲の中で、5つのものがあつたら「2つ食べられるからいいよ」っていうふうにその子も譲歩するでしょうし、皆さんの方でも「こっちの方は食べられないけど、これは大丈夫だからこれ食べて」っていうふうにお互いに譲歩しあうとか、お互いに歩み寄るような感じで、できる範囲のなかで協力していただきたいというのが、第二をお願いしたいことです。本人たちも、理解してもらいたい、できるだけ食べられるものがあるといいなって思ってますけれども、先ほど言ったように、あまりにも自分に気を使ってもらうのは申し訳ないっていうふうに思ってるので、まあできる範囲の中で皆さんに協力いただくと、とてもありがたいと思います。私も親としてやってますけども、そう思います。これからそういう子に会ったときにはそういうことも頭の隅に置いておいてください。ということで、すみません、話が長くなってしまいましたけれども、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

小島：ちょっと早く進んでおりますが、アスルの礼拝される方もいると思いますので、とりあえずここでお休み、休憩に入らせていただきます。次は15時15分からパネルディスカッションに入りたいと思います。3時15分から再開したいと思いますのでよろしくお願ひします。ありがとうございました。

—休憩—

パネル・ディスカッション

小島：再開しますので、マスジド等の代表の方前へお願いします。もう一人か二人いらっしやるはずですけど、マスジドの代表の方前へお願いします。

それでは始めさせていただきます。

去年は私の司会の不手際ということで前野先生に怒られましたけど、実は今日も何も考えてなくて、うまくディスカッションしていただければと思います。私も司会を精一杯したいと思いますが、どなたか口火を切っていただければ。

では去年私を怒った前野先生よろしくお願いします。

前野：アッサラームアレイコム、皆さんこんにちは。怒ったなんて滅相もございません。

自由にとというのが一番難しい題目だと思いますけれど、各地の代表者が集まる非常に稀な好機でございますので、各地の取り組みというのをみなさんお聞きになりたいのではないかと思います。各地でのハラールフード、ハラールフードを各地に住むムスリムが入手しやすいように、どんな取り組みをしているかということが一つ、それから子供たちへの教育、子供たちへのハラールフードに対する認識、教育についてそれぞれ意見など活動がうかがいたいと、私個人的に思いますけども、よろしいでしょうか。

それぞれ、では浅草の代表であられるフッラムさんからお願いします

Khurram Tehseen：アッサラームアレイコム。こんにちは。

First of all I say thank you Waseda University and Institute of Asian Muslim Studies. I am representing here Darul Arqam masjid in Asakusa. My name is Khurram Tehseen and organization is Islamic Circle of Japan.

日本語はごめんなさいちょっと、あまりしゃべれないです。よろしくお願いします。

前野：浅草のダールルアルカム・マスジドを代表するフッラム・テフスィーンと申します。

今質問がありましたけど、The question was what kind of activities that the Muslim masjid are offering in order to enhance or facilitate for Muslims for them to get the halal food easier. That's one point and another question was what kind of activities you are offering for children in order for them to understand the concept and the practice of taking halal food better.

Khurram Tehseen : Thank you very much.

英語と日本語と混じって少しお話しします。今ダールルアルカムの masjid で、一日五回の礼拝、Fajr, Zuhr, Asr, Maghrib, Isha と Salat al-jumu'ah やっております。食べ物に関しては、子供はだいたい毎日 masjid のイマームから勉強しております。コーランの勉強、それからベーシックの勉強、毎日来られない方は土曜と日曜。土曜と日曜は子供たちはそこに来ますので、休みの日は自由に子供が来て勉強しますので、イマームは 24 時間いますので、イマームのお住まいは masjid の上なので 24 時間いますので。食べ物としては、もちろんハラールフード、近くにありますが、そこから持って。ハラールフードがない場合は、たとえば近くのコンビニで、一人のときでもコンビニで。私個人の意見としては、日本ではイスラム教徒として食べ物の問題はまったくありません。全然ありません。ハラールフードは車で 15 分くらいのところにありますのでそこから買って、それがなければ日本のマーケットで魚買ったりとか野菜買ったりとか。毎週土曜日に集まりがあるんですけど、Dars-i Quran、クルアーンの勉強会があるんですけど、そのときみんなにご飯配ったりするんですけど、全然食べ物に問題はありません。

前野：集まるときにハラールフードを利用していると。ハラールショップを利用していると。で、つぶれないように便宜を図っていると。ということで、近くに、車で 15 分というとなんか近くはないと思うんですけど、あるということで、masjid として何か特別な活動をしているわけではないんですけど、ハラールショップを助ける意味合いでも、土曜日の集まりで活用しておられると。子供の教育についてはコーランですとかイスラームの基本教養を教える中で、自然に子供たちがそういったものに接していけるよう、格別な取り組みをしているわけではないということですね。ありがとうございます。

小島：すいません。ありがとうございます。

前野：続きまして行徳 masjid からなんですけど、行徳もですね、幸いなことに行徳 masjid の歩いて 1 分、100m あるかないかのところにですね、ハラールショップがございます。ですのでそちらを、そちらの名前も「ヒラーハラールショップ」というお店でございまして、そこを活用することで、特に masjid の活動の一環として特別な試みは行われておりません。が、もちろん近隣のムスリムも大いに利用しておりますし、masjid での集まりのときにも利用している次第です。子供たちへの取り組みにつきましても浅草と大差なく、

特にハラールについての授業や取り組みというわけじゃないですが、例えばつい最近、1月から始めました、10週間を通しての「ヒラー・インタースクール」とか、あるいは私も関わってます週末学校などを通して‘aqīda Islām、神学、神学というとなかなか難しい言葉ですけども、教義についての授業もやっておりますので、まずは先ほどの藤岡先生の話にもありましたが、信仰さきにあるというものがハラールと関わる上での非常に大切なことになってきますので、信仰を植えていく、信仰を、なんていいますか、子供たちにより深く感じられるよう働きかけていくといったところでの活動を行っております。

ジャミール・アフマド：アッサラームアレイコム。みなさんこんにちは。早稲田大学も本当にありがとうございました。イスラミックサークルオブジャパンの代表のジャミール・アフマドと申します。千葉県行徳のヒラーマシドの近くに住んでいるのですが、イスラミックサークルオブジャパンの下でマシドをいくつかもっていますので、ヒラーマシドと、ダールアルカム東京、群馬県館林のクバモスク、あともう一つは茨城県の水戸アブバカルモスク、もう一つは栃木県の小山バブールモスクと、もう一つは茨城県のムカッラムモスクとあります。そういうのを担当しているのですが、その関係は、本当はイスラミックサークルオブジャパンは信仰の方が強くしていただきたいんですね。[...] ‘aqīdaの方がすごく大切にしておりますので、その関係で勉強させておりますので、いろいろなモスクとかで。「クルアーンとハディースは何々があります。その中は‘aqīdaは何々です」と、それを伝えているんですけど、それ以外はイスラミックサークルオブジャパンがハラール証明書を出したり、イスラミックサークルオブジャパンのウェブサイトでもそういうのができているので、その中のいろんなハラールなものとかも載っているんで、日本語でも英語でもそのウェブサイトに載っていると、それを入れておりますので。どうもありがとうございます。

アキール・シディッキ：(2:00:00) *Basmala*[...]。日本イスラム文化センター会長をやっているアキール・シディッキと申します。本当に毎年のことなんですけれども、早稲田大学にこういう機会を設けていただいて、モスク団体の方が集まるチャンスが与えられることを心から感謝します。早稲田大学は昔から、いろいろな意味でイスラームとの関わりがあって、それこそ早稲田大学でやる宿命だなあというように感じておりました。大塚モスクの活動について、特にハラールについて、うちの永井が詳しくお話ししておりますから、そのへんは割愛して、日本イスラム文化センターは簡単にいえばどういうことしてるかとい

うと、先ほどのジャミールさんの話の中でも、私たちのモスクが一番ベースなんですよね。私たちがまず第一、imān を強くして、もうすでにあって、来る人たちがムスリムの生活ができるようにするのが仕事。どうやってできるかということは私たちが作るのもであって、そのために大塚モスクで *Alhamdulillah* ももちろん五回の礼拝やってますし、金曜日の合同礼拝、それから子供たちの幼稚園みたいなもの、幼稚園と言ってはちょっと大ききなんですけど、幼稚園みたいなものは 14、5 名が毎年でるんですけど、子供を普通の幼稚園よりもどっちかという、イスラームのコーランの *du‘ā* だとか、しつけだとか、ムスリムとしてはどういう生活をすればいいのか、そういうことを教えています。それから毎日コーランを習熟すればするほどイスラームの考え方が強くなってくるし、それから感情も良くなるということで、大塚モスクで[...]クラス、コーランを暗記させるということをやっています。それが 20~30 名くらいは集まるんですけど、この人たちはもちろん学校行ってるから、ごく急に覚えてしまうということではないけれど、少しずつ少しずつ覚えていっている。それをみんなのためにみんなに普及させる意味で、毎年ラマダン 12 月 31 日年末には一回あのクルアーンのコペティションをやって子供たちの間に普及させるというのをやっています。今年はそれは広尾のアラブ・イスラーム学院、そこでやりました。大塚モスク小さいから、一度に入らないから、子供が 130 名くらい、あとお母さんとか、そういう関係をやっております。

それから本当のこれからの課題としては、うちをやってから子供たちは小学校へ行くわけですね。小学校で先ほど聞いたようにいろんな意味で環境がよくなっていて、学校で子供たちがいろんな意味で困ってないような感じがしてきましたけれど、まだまだやっぱり食事だけじゃなくて環境の問題もあるわけですね。先生の話聞いて、みんなと一緒にいる環境の中でイスラームをどれだけ覚えていくのか、どうやって生活に受け入れていくのか、ということが問題になってるわけです。子供の歳っていうのは実際 10 歳前後 14、5 歳くらいまでは、すごく大事な歳なので、記憶したものが残るわけですから、それがベースになってしまう。もし子供たちがそのとき聞いた話が、イスラームに違反している場合、ちょっと違うな、間違ってるなという感じになってくると、子供の考え方が後で *confusion* の問題になってくる。だから私たちが考えてるのは、これは大塚のムスリムだけの問題じゃないけども、全体のイスラームの代表たちの話にもありますけれども、なるべく早くそういう学校、集まってそこで全体の勉強がイスラーム環境でできるような方法を作りたい。そうじゃないと、今ももちろんすごくいいわけですけども、一般的な学校で勉強してそれで育てていくから、日本の社会ですごくいいわけですけども、やっぱりイスラームの意

味では問題なことではあるかなと。やっぱりイスラームの考え方を、ちょっと長くなりましたけど、そういう活動をしている次第であります。どうもありがとうございました。

アブデルファッターフ・エル・オムリ : *Basmala. Salām 'alaykum.* Please allow me to speak in English because my Japanese is not so good, mainly in speaking. I am Abdelfatah el-Omri. I am representative of Tsukuba Masjid or Tsukuba Islamic Association. There is some specificity related to Tsukuba Islamic Association because as you may know in Tsukuba, it is the science city and people from all the world they come there for their study and for their achievements. Our masjid is mainly ruled and run by volunteer working. There is no money coming from any other country or from outside or Japanese government or any. So, everything is running based on the people's donation, people who come to Friday praying or daily praying. They have some contribution that may cover the bills of the masjid. Second, since the community now is estimated to almost 600 families there, so some of the shops they understood the economic value of the Islamic trading. For example, in my side Hanamasa from last year they are labeling halal meat with yellow and it is written in Arabic, in English, and Katakana. When you go to the shelves of meat, you can find halal meat and it is authentic. If someone may ask they will give him the authentication certificate of halal, but since the shop is a little bit far and many people are using bike, so the boarding committee of the masjid decided to set inside the masjid, a halal shop facility and this facility is benefit free. There is no benefit. If there is benefit, we will pay tax for the government and lot of things will come with. The same price that we get from the retailer, it is the same price we are selling for all worshiper who come to the masjid.

前野（通訳）：つくばのつくばイスラーム協会代表のアブデルファッターフ・エル・オムリと申します。英語でお話しすることをお許してください。みなさんご存じの通りつくばという町は科学技術都市でありますので、そちらに在住しているムスリムというのもほとんどが留学生、研究生でございます。600のムスリム家庭がいることから、つくば近辺の商業関係の人たちも、その人たちを顧客対象とした戦略の重要性というものに気づいてきてくれまして、それがゆえにスーパーにも精肉コーナーというのがある中でハラールフードコーナーというのが設けられるようになった次第です。

とはいえムスリムが多く住む地域からは少し遠いところにありますので、つくばのマシドというのは完全に自営と申しますかすべてボランティアでまかなわれております。ボ

ランディアにおける団体でありまして、 Masjidの委員会で、遠いところにあるハラールのお肉を Masjidの一部に、そのハラールフードコーナーというのを設けようというのを決定いたしました。それはただ、便宜性をもたらすだけの営利目的でない、いっさい仕入れの値段とムスリムに実際に提供する値段とは変わらない、という形で提供している次第です。

アブデルファッターフ・エル・オムリ：ありがとうございます。

How we are as a Muslim community in Tsukuba, how we are organizing our daily life or improving the needs of Islam, our teaching the value of halal food for even Japanese or non-Muslim who are residing in Tsukuba. So actually mainly in Ramadan, during Ramadan time, every weekend there is a party that should be held by one community. For example the first week the food should come from Arabian countries, the second week from Pakistani, third week from Bengali, fourth week, it is usually from Indonesia and Malaysia. There is this crossing culture between too many communities and through the food, we can exchange lot of things. These kinds of ceremonies are usually not only for Muslims, they are open for all residents in Tsukuba. If you may come for example, during Ramadan by Sunday or Saturday, you have the chance to meet with a huge number of Japanese non-Muslim or Muslim people from other countries.

前野：How many [...]?

アブデルファッターフ・エル・オムリ：So, the party is usually something like 300 for men or 400 for men and 200 women and something like 150 child.

前野：Japanese are more than half?

アブデルファッターフ・エル・オムリ：The Japanese, mainly ladies who are married with Muslims and some Japanese, who are curious about the Islamic culture. So, usually I don't expect that it should be more than 5%.

前野（通訳）：つくばイスラム協会では常時の活動としまして、近隣住民及び一般の方々に対するイスラームの啓蒙活動といたしますか、イスラームへの理解を高めていただきたいと

いう活動も行っております。その一環としまして断食月にあたります 9 月のラマダンのときには、ひと月 4 週間かかるのですが、その週末にそれぞれの国際色豊かなコミュニティに、一般公開の食事会、断食明けの夕食の食事会の担当をするという形で集会を設けております。たとえば、1 週目の週末はアラブ人のコミュニティが、2 週目はパキスタン人のコミュニティが、3 週目はバングラデシュ人のムスリムのコミュニティが、4 週目はだいたいインドネシア・マレーシアのコミュニティが、といった具合で、もしみなさんの中で週末に、ラマダンの週末にですね、つくばに来ていただける方がありましたら、非常に多くの、それこそ 400 名の男性から 300 名いや 200 名の女性といった大きな集まりがあるのをご覧いただけるでしょう。そのうち日本人の割合としましてはムスリムと国際結婚された日本の女性を主に 5%に満たない程度ではございますけれど、そういった国際色豊かな集いというのが行われております。

アブデルファッターフ・エル・オムリ : Another point is about other activities that we are running is education. In education side, every day after Isha prayer we have in our schedule one book. This book for example about Hadith, about *al-'aqīda*, about the history of the early Islam and about the philosophy in Islam, about science and Islam, and so on. Every day after Isha prayer, one of the brother will lead the people and tell some kind of lecture, it is around 30 minutes and it is open for one question for other people.

It depends on the audience. If only Arabic people are together, so then it is easy to communicate in Arabic, but if it is mixture then it is English. The other thing is on weekends, Saturday and Sunday, we have Arabic class, Urdu class, Japanese class, and the Hadith Quran class and all these classes are free of charge for children. The parents pay something like 500-yen, 1000-yen per year. The van of the masjid can go around to take the children from their houses until the masjid to support the parents because everyone is busy on the weekend. So, the van of the masjid will go to each door and knock the door and take the children and after we finish the courses, they return back the children to their homes.

前野 : They are dedicated to children?

アブデルファッターフ・エル・オムリ : Yes, mainly to children. And for old people, also we will have special classes if the number of the people exceed two, then we can make class for anything

they want.

前野： Each class is how many [...] children?

アブデルファッターフ・エル・オムリ： I will tell you about the past, for example, the last year the number, sometime it is for each class, for example less than 5 years, *gosaimae*, six children. Over 6 until 10, usually these students they can learn Arabic and memorize Quran, something like 10 and for old people, we have around 15 to 20 people dependent on the week. Unfortunately after the earthquake that happened many people left Japan and suddenly this leading volunteer work collapsed and now little by little we are fighting, *Alhamdulillah*, since last month we started again with new blood and with new passion and now many children are coming in.

前野： You mean old are adults?

アブデルファッターフ・エル・オムリ： Adults, yes.

前野： Thank you.

前野（通訳）：別の活動としましては、毎日、イシャーというのは最後の5回目の礼拝を言いますけど、夜の礼拝後30分ぐらいにですね、イスラームのいろんなトピック、教義ですとか先達の歴史についてですとか [...] 預言者の伝承ですとかさまざまなトピックで、それぞれ役割分担、担当を決めて、30分毎日この時間が設けられています。また週末の活動としましては、特に子供向けの活動としましてはクルアーン暗記クラスですとか、アラビア語やウルドゥー語や日本語クラスといったものがございまして、それこそみな親が忙しいということで送迎のサービスまで提供しながらですね、子供たちを集めてまた送り返してといった活動を行っております。それぞれのクラスで5歳以下の子供たち、6歳以上10歳以下の子供たちが10名ですとか、また大人向けは15から20名といったような形で盛んに行われていたんですけど、残念ながら震災後多くのものがつくばの町を去ってしまいましたので、それまでうまくいっていた活動が急にしぼんでしまったわけですが、最近また志を新たにしましてその復興というのを一步一步進めておる次第です。

アブデルファッターフ・エル・オムリ : Another point is we are talking about halal food. We have one big ceremony as Muslim. In Japan I have marked so through the 5 years that I spent here is '*Īd al adhā*'. During this facility or during this ceremony, usually Muslims in Japan are facing big difficulties to slaughter their cattle or a cow or anything, baby goat for the sake of Allah. Herein I will just talk about the philosophy meaning of food. Food is the only thing that we can ingest and when we ingest we are thinking about too many things. The first thing is this food that I will eat will kill me or will let me safe. The second is the value of this food that I will take corresponds to its price? The third thing is, is it this food that looks like *oishiso*, it looks delicious, is it really delicious when I will take it, and another point is for the Muslim thinking but when we take any food, the intake of the food is to give us power and this power will help us for to be devoted to our muscle power. The act of eating is an act of worshiping, it is not an act of eating as animal act or biological act. It is an act of worshiping. The other point that it is only referring to the Muslim culture or the Muslim religion. For example, if you may visit someone we can bring new gift, nice food or to show our love to a kin, also we can give him something food, but as Muslim we have one holy month during the year and this holy month is Ramadan. During it we offer our hunger, we will starve from eating just for worshiping and it is special for Muslim culture. The meaning of food in some Japanese friends, for example in my case during party in work they have difficulty why you don't drink alcohol for example during party, why do you refrain from eating this food or this food and so on although we are in community and we are working together and we are alive or [...] happy. The act of worshiping the food is special thinking in the philosophy but unfortunately we Muslim here in Japan we did not make effort or big effort to standardize the meaning of halal because our talks or the talks that I am seeing that we are talking about haram and halal. But the real talk is in between. Between halal and haram, which is mushbooh but I cannot tell to someone that this food is haram or this food is halal. I can tell that it is halal it is okay, but I cannot say 100% this food it is haram if it is not, but often there is some ingredient who are haram inside.

There are a lot of Muslim scientists here in Japan in computer science or in food technology or in biology but they did never make the effort to explain scientifically what is the meaning of halal and haram and mushbooh. For Japanese, they can follow the behavior of people, someone is really severe with his diet, they only eat halal food, other people they are flexible, for them they don't ask about the origin if there is no pork, there is no alcohol inside, there is no dead animal, so then say it is a noble for me to eat it.

The real matter is in the in between. Actually, in Japan everyone has an iphone, it is high-tech country, but the barcode why we don't think about the database that this database may detect easily just when you take a photo of the barcode of the food, you can check all the ingredients which are inside. The second thing that people are asking there is [...] there is emulsifier, there is shortenings, there is origin but it is oily or margarine, so if the origin of the ingredient is haram, is the ingredient haram or halal? Here a meeting between scientists and scholars is necessary. Another point that it is challenging the Muslim culture not only in Japan, in all the world now we are going to functional foods and nano foods. Personally I am working on this topic and as a scholar they are so far from the nano foods and functional foods, new ingredients we have injected in the food and we don't know whether in Islam they are halal, haram, or mushbooh what should we do? This kind of meetings really will have the benefit but we can standardize and upgrade and be looked up every day.

前野（通訳）：最初に申されたのは、大事なこととしてとらえているイベントの一つにですね、イードアルアドハー、犠牲祭というのがございます。犠牲祭では唯一の神アッラーにささげる犠牲として動物を屠るわけですが、日本では公共の場で屠ってはならないなどいろんな規定がございますので、困難に直面している同胞がたくさんいるということで、つくばとしては、という話に進むのかなと思ったらまた別の話に進んだので...。大事なものは食べ物についての考え方です。人間が食べ物に接するときというのは、いざ目の前にある食べ物というのが自分のためになるかどうか、それから本当に食べられるのかどうか、またおいしそうとか、といった 3 つのポイントが基本になるかと思いますが、ムスリムにとって大事なのは 4 つ目のポイントでして、それは自分がその食べ物を体内に入れた後に自分がささげる信仰行為に結びつくか、役に立つかどうか、またその意味から食べるという営み自体が信仰行為と直結しているのです。食べること自体が信仰行為なのですと、信仰を体現することなのです、ということを強調されまして、なのでその辺をわかっただけないと、多くの場合、私、彼の場合にも、友人と接するときになかなか理解してもらえない。どうして同僚なのに、仲間なのに、どうして同じものが食べられないのか。自分は君が食べられないものを食べてるけど平気だしハッピーだよというようなことを言われるわけですが、いや自分にとっては食べることイコール信仰行為なので、ということがございますので、その辺が一番大事なポイントでございます。加えて問題意識としてみなさんにわかっていたいただきたい、それからみなさんで分かち合いたいということの一つ

として最後に挙げられましたのは、残念ながら私たちがこれまで耳にしてきた、あるいはよく耳にするムスリムの食についての話題というのは、ハラール—許されたもの—あるいはハラーム—禁じられたもの—についてのものがほとんどなわけですが、課題として私たちが改善策なりを検討していくべきは、その間にあるものです。その間にあるよくわからないもの、あいまいなものについてなわけです。本来であれば目指すべきは、食に関わるあるいは科学生成に関わる研究者なりとイスラームの宗教学の学者が一堂に会して、そういったものを検討する、議論するといったことを通して、そのあいまいでよくわからないものを解明していく営みが行われていくことが望ましいと思います。そうすることでこれは日本のムスリムにとってのためになる話ではなく、世界中のムスリムにとっての基準を提供する新たな、非常に有意義な営みになるかと思います。といった感じで要約としてはいいですかね？

アブデルファッターフ・エル・オムリ：(長い話を聞いてくれてどうもありがとうございました)。

サリフ・エゼル (岐阜ファーティフ・モスク)：[...] (2:30:50)

私は岐阜県の岐阜ファーティフ・モスクのイマーム・サリフです。日本語ちょっとしゃべれるけど、私は英語の方がいいけど、今から英語にします。

前野：やめてください。時間がかかるのでできるだけ日本語で。一人3分で。

サリフ・エゼル：それは大切な問題だけど、ちょっと無理。

First, I would like to thank Waseda University for organizing such an important meeting. This is a very important matter not just for people living in Japan but also for Muslim countries as well. Halal food is very important matter for us Muslims because what we eat as old scientist said there is a word, you are what you eat. So whatever we eat it affects our lifestyle, it affects our *ibadat*, our prayers. When we eat haram, continue to eat haram we increase the possibility of committing sins. Therefore, we stray away from Islam, from our [...] that's why this is very important matter which we need to discuss not only today but any time. In our masjid in Gifu...

前野 (通訳)：時間がないのは承知してますけど、すみませんが私の気持ちを十分に表現で

きるように英語とさせていただきます。この食についてのトピックとしますと、私どもムスリムにとっては、この日本に住むムスリムにとってだけでなく世界のムスリムにとって非常に大切な問題です。課題です。と申しますのは、科学者が申しますように「あなたはあなたが食べるものだ」ということで、私たちが食べて体内に取り入れるものによって私たち自身が作られていくものですから、実際に私どもムスリムにとってみれば、食べるものが私たちの信仰行為に直結していくものでもあるからです。たとえば、ハラールで許されたものを食べれば一層元気に活発に信仰行為を営んでいけますし、そうではないハラームなものを数多く口にすることによって自分の信仰行為が台無しにされてきてしまいます。

サリフ・エゼル：Because it is very important matter every week we have lectures for people. We discuss with them and inform them that as you all know when you look at the back of very package there is number. 電話番号。 We are reading this number and ask the person opposite if there is anything that is 動物性、入っているか入っていないか。聞いたら、みんな返事するでしょ？でも電話するとき、私は菜食主義者ベジタリアンですから、といった方がいいです。「私はムスリム、肉食べない」というと、人はちょっとわからないから「大丈夫、大丈夫、肉入っていない」といいます。私は「大丈夫、肉入っていない」と聞いたら、「私はベジタリアンです。肉食べると死ぬです、たぶん」といいます。そういうと「すみません、すみません」とちゃんと見て、植物性か動物性かどっちですかと聞いたら、みんなは返事しますね。肉かと思わないかもしれないけど、お菓子とかドリンクとかもいっぱい問題あるでしょ？ミルクの中にも動物性のものが入っているから。それは私たちに問題になっています。だったら私たちはみんなに、パン屋さんからパン買わないで、これは自分で作った。だからみんな自分でブレッドメーカー買ってね。みんな家で作っています。それと一緒に、私たちは愛知県三重県岐阜県では、子供たちに勉強教えてる。[...]とか[...]Sura, Hadith とか全部教えてる。今、子供たち毎日毎週勉強します。子供たちと子供たちの親御さんと一緒に。私はトルコ人ですけど、私はイギリスで生まれた。日本の前にイングランドに住んでたから。子供のとき、毎日家に帰ります。Eの番号が書いているものを探します。それが入っているものは[...]。子供たちはお菓子買ったでしょ、私はいつも後ろを見てる。何が入っているか。だから私は小さい時からそれが問題になっていた。だから私は日本に住むムスリムの子供たちの問題としています。私も同じだったから。私はいつも子供たちに説明します。これはハラームです、ハラールです。でもあの、

If we do not give opportunity, a chance, a choice then it is very difficult. If you just say

haram これはハラールといたら、食べない。これはハラーム。食べていい。

If you give choice, it is very important. That is why you must give choice. Also, in order to solve this problem, this very big problem, we need to come together not just by ourselves but with big communities, with the companies who are in Japan, in Europe, and in most of the countries. When you look at the back of the packages there is a V sign, green V, for vegetarian. So when you want to buy something which you can eat halal you look at back it has the V. So if we can do same thing for Japan as well. I know in Japan there is no concept of vegetarian, most people eat meat anyway. But if we can bring this concept that vegetarian if we could put a V at the back of every package for most companies to set use, then it will be become easier for Muslims in this country and for vegetarians as well, not just Muslim for vegetarians as well to eat what they would like.

前野（通訳）：彼自身がイギリスで育っているので、子供のころ原材料を確認することについて悩んだり[...]ということについてはよくわかっていて、身をもって実感してきているので、今子供たちへの教育活動を行う上でも、そういった話をしながら選択の余地を与えることの大切さを痛感しております。こういったトピックにつきましてはこの場だけでなく、常時いろんな機会にお話をし続けることが大事で、願わくは、ムスリム・コミュニティだけでなくより大きなコミュニティ、より大きな範囲でこうしたことを議論していける機会を持てるとよいかと思います。たとえば、イギリスなどでは商品の裏側にすべてベジタリアンの方の食するようなマークとして V マークがついているようですが、日本でも会社や企業を巻き込んで行っていただけらと思います。

（御徒町マスジドから）：あの、私ね、アッサラーム・ファウンデーションの御徒町にあるマスジドから、今日は会長来ていないから、会長の代わりに来ましたんですよ。今日はハラールのことでみなさまちゃんと丁寧に説明して、どんなこと日本から話す感じですけど、今私言いたいことはね、全部正しいのこと、続ける人たちの話は同じことだと思うんですよ。だからマスジドのことだけ私言います。うちのマスジドはね、毎週水曜日タフスィール、礼拝を 6 時半からやっています。あと毎週土曜日は集まりあります。あとはアラビア語も教えています。あとは詳しくは assalaamfoundation.org を見たらわかると思います。

Fady al-Najar : Salām ‘alaykum. My name is Fady al-Najar. I am representative of MSAJ, Muslim Student Association, Japan. The idea of MSAJ is that an organization that actually there are members

from different universities in Japan and we try to put all these Muslims organizations in different universities in one group in a mailing list and we try to share information, share experience, and we try to meet twice or three times a year where we can have a discussion, invite some scholars from outside Japan to discuss or to talk about our religion and different things so people or Muslim students who arrive Japan they can still have the idea of the atmosphere of Islam in Japan. The main target of MSAJ to be a background for newcomer Muslim students, so they have a background where halal food they can find, where other Muslim community in Japan to meet, or where is the musalla or place to pray and we have help some organizations, student organizations to find place to buy so they can have their own mosque or to start halal shop or halal activity. This is the organization of MSAJ and this is our main task.

Now actually thanks for everybody who introduced things about halal. Brother Abisadah, he said something is interesting is the halal and haram and the thing between and the MSAJ tried to solve this problem by having a fatwa center that started 2 years ago. We know that there are different things that new Muslim or newcomer to Japan is unable to self decide, especially in the halal food because of many different things going around. We started the fatwa center where we have scholar from Al-Azhar university. He graduated from Al-Azhar University, he is own an imam of Ibaraki mosque in Osaka and we try to solve this issue. I used to then have some issue related to halal or haram in the food, which I could solve based on this fatwa center, so he can ask us and we try to transfer this information to the imam and imam will answer [...]. Why we started this actually because this halal and haram thing is very wide thing and the thing in between also is the big thing and self-decision in such kind of thing is very difficult, so we always try to refer to imam or scholar who have knowledge to give us knowledge and he should be living in Japan because everything depend on situation or living in place. Mufti from Saudi Arabia, even like we have asked about like mufti from Saudi Arabia cannot give fatwa regarding to halal and haram inside Japan in some cases. So, there should be a mufti or a guide who can have knowledge to give a fatwa, we should live in this situation and know what is going on in the situation so that we can give fatwa regarding the situation that we are. This is our activity regarding to halal.

前野（通訳）：MSAJ、日本学生ムスリム協会代表のファディ・アルナジャルです。まずこの団体の説明をされまして、基本的に日本にやってくる留学生ですね、留学生のサポートのために設立され、また運営される団体です。日本に特に不慣れな来たばかりの留学生向

けに、ハラールフードの入手方法ですとか、場所ですとか、礼拝しやすいところですか、そういった情報提供とともに、年に2,3回の集まり、集会というのを開くことで、日本に住むムスリムがさみしい思いをしないように、少しでも暮らしていきやすいような活動を行っております。

このハラール、食についての取り組みとしましては、大阪の茨木 Masjid のイマームさんでエジプトのアズハル大学を出ておられる方にですね、質問して答えていただくという形で、ファトワー・センターというのを、ファトワーというのはイスラームの法的な見解を言うのですが、そういった相談室を設けております。それを2年前ほどから始めるようになりました。このファトワーと申しますのは、法的な見解をイスラームの学問の知識の中から導き出していくわけですが、イスラームの学問の知識だけでは事足りず、現状認識現状理解というのも非常に重要な要素となってきますので、イスラームの学者というのは各地にいるわけですが、サウジの学者に日本のことをくわしく、特にまたあいまいなはっきりしない事柄のことについては答えていただくことができませんから、日本に在住のイスラームの学者に答えていただくことは必要だということで、そういった試みをしている次第です。

オバル・アブドゥルカーディル：*Basmala* [...]。こんにちは、オバルと申します。四国の徳島 Masjid の代表として来ております。よろしくお願ひします。時間があまりないからできるだけ概要の話をしようと思っておりますけど、徳島 Masjid は最近設立された Masjid で、2008 年に法人を作ってそのあと物件買って、Masjid として使うことにしました。徳島モスクは四国の中で二番目のモスクですね。ムサッラーを除けば、モスク専用の建物として、愛媛県の新居浜モスクが第一位で、第二位は徳島モスクです。徳島市に住んでるムスリムはとても少ない。100 人、150 人いかないくらい。非常に単純に暮らしてる単純な社会だから、ほとんどのムスリムは留学生。最大は 4 年。ポストドクターで来た人たちとか、日本にいてからみんな帰ってるから、問題はある程度限られてる。二世代之問題はそんなに問題ないですけど、ずっと日本にいる人たち留学生とかビジネスやってるムスリムは非常に少ないからですね。徳島市にハラールレストランなしで、ハラールショップもなしで、一番近いハラールのレストランは香川県の高松にある。75 km ある。最も一番近いハラールショップは神戸市にある。だから買いに行くとか外食しに行くのはとても難しい。高松行くことはよくありますね。ラマダンとかイードのときに。結局モスクができる前に、1998 年住んでたムスリムたちが協力して、寄付集めて冷凍庫買って注文の予算獲得して、1 か月

に2回3回くらい大きな注文して冷凍庫に置いて、モスク設立する前にマレーシア人の家において、マレーシア人の家のドアはいつも開いてる。買いたい人は勝手に中に入ってお金を箱に入れたりして、単純に本当に単純に暮らしてる。注文した値段、おんなじ値段プラス50円ね。この50円何に使うか。マレーシア人かわいそうだから、冷凍庫の電気代、あとムスリムの活動をカバーするために使ってます。徳島モスクいろいろ活動やってますけど、早めに言うと、ときどきBBQあるし、ときどき小旅行しに出たり、大きな公園とか。そのとき、ムスリムの家族みんなそれぞれに自分の料理作ってみんな小旅行に持ってきて、分け合ったりしています。

それと最近、モスク設立してから、懇親会みたいな活動し始めて、周りたとえばご近所さんたちですね、ムスリムじゃない日本人たち誘って、一緒にオープンデーしましょう。モスクの中見学してもらって、モスクとイスラムについて短い発表して、そのあと一緒に食事しましょうということをしていて、もちろんその食事の食べ物全部作って、家で作って持ってきてる。

最初に二世代之間問題少ないといったのはなぜかという、留学生の子供たちは徳島市に生まれたか、生まれたばかり1歳とか2歳だから、幼稚園や保育所にいって少しだけ話にいたり、この子供たちに協力してほしい、ハラールだから食べれるもの食べられないものとか、本当に皆お世話してくれて、思いやってくれて、とても大丈夫でした。

外食しようと思ったら、よく知られてる回転すしとか、ガスト、ジョイフルのすでに決まってるメニューの中たぶん1個しかない食べられるもの、それは焼き鮭定食。それしか食べることができない。すでにレストランの人わかってる。あとはときどきピザ食べてみたり、バイキング行くこともあるし、それは自分で選ぶ。魚だから大丈夫とか、材料は何ですかとか教えてもらったりとか。

徳島モスクで、徳島モスク設立する前に何かリストみたいなもの作っておいて、印刷してみんなに配って、リストの中に豚の漢字とか、お酒、カタカナで書いたアルコールとか、いろいろ書いて、みんなポケットに持って買い物しようと思ったら、そのスーパーで原材料調べて、原材料の中にこのリストに入ってるものがなければ、それはハラールとわかって買ってる。何回も何回も日本語しゃべれる人が来て、お店の人と話してくれて、電話代わってくれて、時間たってからわかります。判断できます。ソフトバンクだったら9時以降電話来ないですね。

最後に、実は私最近名古屋に引っ越しまして、名古屋の代表いないから、名古屋のモスクはとても助かると思います。名古屋に引っ越ししてから、ハラールショップは本当によ

くありますね。私が住んでる中村区というところ、ハラルショップやハラルレストランが3つ以上あります。名古屋モスクの周りにレストランもよくありますね。だから、問題もあるんですけど、何十年か名古屋に住んでいる日本人もムスリムに対してなじみがある。「あ、ムスリムですね、礼拝は？」とか「食べ物食べれない」ということよく知ってる。これで以上です。ちょっと早めに言って、すみませんですけど、ありがとうございました。

ムハンマド・エルノービ（福岡 Masjid）： Salam ‘alaykum. My name is Mohammed El-Nobi. I am from Fukuoka Masjid. First, I will speak about the activities of Fukuoka Masjid. [...] anyways [...] as far as about the education in mosque, we have what you can say Sunday school. It is every Sunday. We have a school for the kids. We have around 70 kids in this school. We are teaching them Arabic language and Islamic status and Quran and sometimes we teach English. Also for the kids we have what you can say Quran classes. This is basically 3 days every week. We ask the van if mosque people like to go. We ask the van to go to all the houses of the kids and bring the kids to do the mosque and send them back again. So we have around 23 kids in this program. It is 3 times a week. This is for education. In education of kids, we usually on separate note to teach them just the subjects but we teach them how can revise our systems and speak about the difficulties which faces Muslim students in Japan. They ask many questions why is this and why not is this? We have this concept to teach them how can they live in Japan as a Muslim. It’s very important then to teach them subjects, to teach them how can they live as Muslims in Japan, it is very important.

Also, a second issue we have is we have good relations with the neighbors. We are member of neighbor association. So, we participate in what you can say is cleaning day with them. First when we started this mosque actually some of us [...] we felt many of [...] to be a mosque in this area. But after a while, after we showed them good image about Muslims, they accepted us and now we are a strong member in this neighbor association. We could participate in all the activities of the neighbors and we have what we can say neighbor day. In this neighbor day, we have asked every Muslim in Fukuoka to gift some present to his neighbor, not present but may be some dish, some traditional dish, for example if he is an Egyptian, I give them traditional Egyptian food and if I am [...] I give them [...] traditional food. We usually [...] we used the [...] and we ask them to do this. We are not to force a lot of people but we ask them and we trust of course each other.

前野： How long to complete?

ムハンマド : Around give me just 5 minutes more.

ムハンマド : We also have what's called mosque days. Every 2 months we have mosque day. All of us come together and [...] whatever we can do. In Ramadan we have everyday breakfast. We take breakfast, we take iftar together every day. Every day we are supposed to have iftar and we make it special day for our neighbors and our friends Japanese, non-Muslims, we make it special day for them, we ask them to come and make special food for them. Also, we have the same [...] like every Sunday, [...] persons, make their food and invite others. We have also seminars, seminars about culture meet every 2 weeks. We have Quran for other every Sunday. We have also which can say the [...] the grandchild of [...]. This is especially to teach kids how is the life in Japan every Saturday night. It is stopped now but we hope to make it again.

Also, we [...] about halal foods. This will [...] temptation for the newcomers, Muslim newcomers and this will [...] explain to them about halal food and *zairyo* components of which halal and which haram and which is maybe some doubt in it. Also, we ask Japanese professors to come with them. That is really important. We welcome Japanese professors and [...] because they accepted Muslim residents and tried to explain to them the basement of Islam. Maybe I explain [...]. We do this is Fukuoka. We ask them just to accept, this is a Muslim and he has this character. He will pray 5 times a day, he will fast Ramadan maybe [...].

Last thing about halal, now we are certified to give halal certification especially for the Asian community. We are giving halal certification and we have maybe halal forum may be 2 months before and we will have another one but we don't [...] organized halal food 2 months before and we have a halal conference. We asked Osaka halal Japan to come and give two lectures for all Kyushu about halal food. We also make a conference [...] we could make [...] to accept making halal restaurants. It's like the [...] we have now. Inside every campus we have halal restaurant [...] completely halal inside every campus inside [...]. Also, we have system where they invited their Japanese friend and Japanese neighbor to eat all together and teach them how they can cook Islamic dishes like [...] and so on. That's all. Thank you so much.

前野 : 福岡マスジド代表のムハンマド・エルノービです。[...] 福岡マスジドはそもそも設立時に隣人に設立を拒否されたという経緯がありましたので、まずはイメージをよくしようということで、さまざまな隣人へのアプローチ活動を行ってきましたし、今も続けてい

ます。その中の一環に巡礼のクライマックスの犠牲祭にあたります日がございますが、その日を福岡のマスジドの日としようということで、隣人に食べ物を何らかの形で提供し、ささげて接点をもつようなことを行ったりですとか、新しい入信者がいたらすぐに紹介して、そのようなお話をする中でハラールについても説明し、コンセプトについても触れるですとか、あるいは子供の教育につきましては、週末学校というのがありまして、70名ほどの子供たちが通っています。毎週3回クルアーンの講義を行っており、26名ほどの生徒が送迎サービスとともに通っておりますけども、子供たちに教える中で一番重点を置いているのは、いかに日本でムスリムとして生きていくかということで、情報としての教科内容よりもその点に重点を置いております。

それから隣人の日の別のアプローチとしては、マスジドツアーじゃないですけど、隣人を招待して食事会とともにマスジドを見学してもらって、少しでも良くしていこうというものもありますし、あるいは九州大学の教授の先生方をお招きしてアプローチをしたり、またさまざまな大学に対して九大のほうから各キャンパス内にハラールレストランを設置していただきたいという内容の書簡をだしてきたりしたところ、幸いなことに多くの大学がそれに応じてくれまして今や九州にある全大学にてハラールレストランというのが確保されるようになったということでございます。他にもいくつかさまざまな活動を行っておりますので、申し訳ないですけど、内容としてはこんなものです。

前野：すみません、水戸代表のイシュラト・ハーシムさん。

イシュラト：[...] 私も ICOJ が運営するモスクの中の一つ、水戸にありますマスジドの代表として参加しました。私もマスジドとしての活動はみんなと同じ、ラマダンのこととか、コーランのクラスとか、礼拝とか、周りの人たちといい関係を持つとか、おんなじです。あんまりそういう話しても、時間もないし、食事のハラールとハラームのことは、私は自分の考えでは今はそんなに問題にはなってないと思います。どうしてというか、ほとんど、ハラールはもちろんあるんですけど、ハラールの中に自分でも好みがあるんですよ。食べられないもの、ハラールでも、寿司とか日本で食べられるものにも、自分が食べたくないものがいっぱいあるから、自分の問題だからあれですけど、私も自分で見て外食もするし、いろんな日本のものも食べるし、もちろん食べられないもの以外は食べるんですよ。たとえば納豆とか、寿司とか、いろいろ食べられるものはいっぱいあるんですよ。全部ハラールとかハラームとか分けてハラールの中にも探せばいろんなレストランで食べられるもの

がいっぱいあるんですよ。そんなに問題は今はなっていないと思うんですけども、もちろん買い物するときはたぶん他の国でもハラールはそのイスラームの国以外ではそこで作っているものじゃなくて、イスラームの国から輸入してストアの中に置いてあるものを選ぶんですよ。そうすればちょっと楽になっちゃう。日本では今大きいデパートとかでは、そんなにはイスラームの国から輸入したものおいてないから、問題になってるんですけど、それがあればたぶんそんなに困ることはないと思います。でもそれでたとえばいろんな日本人が[...]で食べているものが食べたいときもあるんですよ。でもハラームだから私食べられないから、おなじ物の材料買って友達に食べさせてる。友達に作ってあげてる。同じ味ができるように頑張ってる。自分でも努力しないと、いろんな問題がでるんですけど、自分でも協力が必要なんですけど、私あんまり、また時間がないから、それが言いたかったんですけど、ありがとうございます。

小島：どうもありがとうございました。

司会を丸投げして前野先生にご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。通訳も的確で私はあんなにできないので、非常にありがたいと思います。前野先生とイスラームの先生方に拍手をお願いいたします。

これからみなさん質疑応答なんですが、報告していただいたお二人の永井先生、サバー・アーリフ先生。

前野：よろしいでしょうか。一つだけ、触れられなかったのでコンセプトについて補足させてください。ハラールとハラームの話になると、どうしても誤解されがちなんですけど、特に食について語るとなると顕著にあらわれてくるので、忘れがちなんですけど、ひとつみなさんイスラームに関心があって接点があってこられている方がほとんどかもしれませんが、改めておさえていただきたいのは、イスラームでは基本はすべてハラールです。基本はすべてハラールです。基本はすべて許されているんです。[...]そこをどうしても誤解されるんですね。ハリネズミのジレンマではないですけど、ムスリムそれぞれに、さっき永井先生が言ったように信仰生活に対する温度差があります。ですので、シビアであろうとする人、それはいいんです。それは敬虔な姿で素晴らしいですけども、あろうとすればするほどですね、近くの、特に食については周りの人との接点というのが非常に大事になってきますので、関わりを持つ中で、本人は周りの特に日本のみなさんに少しでもイスラームに近づいてもらいたいにも関わらず、自分がシビアであるがゆえにですね、相手には

ものすごく厳しくて取りつく島もないようなイメージを与えてしまう。というのが現実のように思うんですけど、それこそハリネズミのジレンマじゃないですけど、違うんです。基本はすべてゆるさされていて、その中で限られたものだけが神の御慈悲のよって、その方が人間のためになるから避けた方がいいよという指標があって、教えがあるわけですね。以上です。

小島：では質疑応答ですが、サバー・アーリフ先生はムスリマの方なので、男性の方はちょっとあれがあるかもしれません。いずれにしても会場との質疑応答をしようと思います。何か質問とかご意見とかある方はいらっしゃいますか？

会場：日本語で失礼します。大阪国際大学というところから参りました、三木と申します。一点だけ、ICOJ のジャミールさんに質問させていただきたいのですが、ハラール認証を日本の企業に与えていらっしゃいますね。そのハラール認証を得てイスラーム世界に進出した企業だと思うんですけど、与えた後何かチェックですか、要はちゃんとハラールのルールを守っているかどうかというチェックはなさっていらっしゃいますでしょうか。ハラールに関わる産業というのはこれから日本の産業にとって小さくないと思っておりますので、ご質問させていただきました。

ジャミール：どうもありがとうございます。それはちゃんと 3 人の担当のイスラミックサークルオブジャパンの方がおりますから、一人はアフィーラ先生、シリアから、[...]イマームもやっておりますので[...]。あとアフマド前野アブー・ハキームさん。その人はシャリーアをシリアから勉強してきたんですね。もう一人はビルマのサリームさん。その人もリビアからシャリーアの勉強をしてきたんですね。その 3 人の担当になっておりますので、もしハラール証明書を必要なところ、ほしいところを知ってる時は、向こう行ってちゃんと材料のこと確認して、それで証明書出したりとか、そういうのあるんですね。

前野：代表を前に怒られてしまいますけれども、今初めて聞きました。ですので今話は今後のことだと思います。

ジャミール：今年のプランですけど、今後証明書を出すときの。

アキール：先の質問につながりますから、大塚モスク、イスラム文化センターなんかもハラール証明を出してるわけですね。私たちの方も、やはり肉のハラール証明書と材料の証明書というのを出しています。その場合は、ハラール肉の場合は個人の人を送って視察を行って全部加工まで、全部チェックして、パッキングまでの段階をチェックしたものをハラールですという証明書を出しています。それから材料の方は個人で作ったものとかあると、その場合はそこから材料などの分析とかそういうものもやって、加工段階をチェックしてそういうプロセスのうえで、こちらからエンジニアの勉強した人、そういうこととしてまず第一に Survey します。Survey したものを、そのレポートのベースで、レシピには何も入っていない、他のものの混ざる可能性がない、と。ということでレポートに、ファトワーをもらう場合があります。そのファトワーは、今はパキスタンの代表から、@@@こちらの条件を詳しく説明してそれに対するファトワーをもらったうえで証明書を発行しています。

前野：たぶん、事後、この後についての質問だったと思うんですよ。認証した後、抜き打ちテストとか...

アキール：肉の場合は問題ないんですけど、すべての物がハラールシールを貼ってある。だからハラールシールの貼ったものもあれば、それがいつとられてどこでされたかということちゃんと記録とってます。それから他の証明書については、1年有効の証明書出してます。その条件としては材料と加工方法の変化があった場合は直ちに知らせてくださいという条件を付けています。そしてもちろん必要があるときに検査できるようにしてはありますが、今までの材料見た上では、途中でびっくりするような検査する人は今までなかった。それはやってません。

前野：基本は一年ごとの更新に？

アキール：一年ごとに工場に行って。

小島：他の方は？

会場：日本ムスリム協会の樋口と申します。今ご質問があったハラール商品の件なんです

けども、日本ムスリム協会の場合もハラール証明出していますが、非常に条件が厳しい、役に立たないと、日本のなかでは厳しすぎるとの批判があるんですが、混同していただきたいくないのは、日本ムスリム協会が出すハラール証明は日本で生産された添加物とかそういうものがイスラム国に輸出されるケースですね、ですからマレーシアの JAKIM とかインドネシアの MUI とかから、日本ムスリム協会の出す条件はスタンダードとして認められるという認証を持っているわけです。したがってムスリム協会の立場としては、国内で生産して国内で消費するもの、これは基本的にはお断りしているということで大塚モスクとか浅草モスクとかの方で出していっちゃると思うんですけど、その辺の違いがあるということですね。ハラール認証について。ですから日本ムスリム協会が現在非常に厳しい条件を課しているということは、日本で生産されたものがイスラム諸国に輸出されることができるということ。

次いでちょっと質問なんですけどよろしいでしょうか。ハラール、ハラームそして中間的なものがありますけども、ちょっとお聞きしたいのはですね、オーギービーフですね。オーストラリアから輸入されたもの、これについてはですね、非ムスリムであるから異宗教の国から輸出されている。ブラジルもそうなんだけど、だからいいんだというファクターがあると聞いてるんだけど、この辺のところをみなさんがどういう風に意識されているのか。オーギービーフはですね、日本のスーパーマーケットでも非常にいい肉が安く出ているんですね。福岡に私は一度行ったことがあるんですけど、福岡モスクの近くにスーパーマーケットがあって、そこにもすごくおいしそうなオーギービーフがたくさんあるんです。私がちょっと考えたのは、福岡の人たちはそれはもうハラールとして食しているのではないのかなと認識したんですけど、ちょっとそのオーギービーフについても、できれば見解をお聞きしたいと思います。

前野：担当者を指定していただいてもいいですか？

会場：どなたでも結構です。

???：これは考えいろいろあると思うんですよね。あなたの場合、非常にその、ハラールとハラームとの中間という知識がありますけども、私の基本的なスタンスは、前野先生が言われたように基本的にはすべてハラール、許された食事であると。永井さんが最初に説明した食卓章の何節に示すこれとこれとこれはだめだと、それを食べなければ基本的に

はいいいんじゃないかと、中間的なものはあまりないんじゃないかと。だけど食材についてじゃなくて、プロセスにおいてどちらかわからないものがあるんですけど、多くは食材じゃないかなと思うんです。プロセスにおいて日本での場合、ムスリムじゃないとダメだということになると非常に難しいのではないかと思います。

小島：お答えになられる方は？

前野：すみません。イマーム方に聞きたいと思うんですけど、基本はすべて許されているという基本概念を理解していただくようお願いしましたが、もう一つ補足させていただきます。永井先生が引用された、またムスリムのなかで非常に親しまれている預言者ムハンマドさまの指導というものがあります。それは中間には曖昧なものがあって、それは避けた方がよいという話ですね。ですのでこの指導に従って、各人がいわゆるセーフティネットをそれぞれのスタンスで広げようとするわけです。だから、それに対しては本来は第三者が立ち入るべきではないんですよ。裁くのは唯一アッラーのみとされるのがイスラームの教えですが、それが故にこのハラール認証ですとかこの議論自体がヒラーファ、ハリーフアが、オスマン帝国は今はない状態ですが、イスラーム共同体が力を持っていたときには、全然また、特にムスリムが非ムスリム諸国に多く移民する前までは全然話題に上らなかった。誰も見向きも考えもしなかった話題なわけですね。もしそれが authentic なイスラームの基本の基本の事柄としてあるのであれば、私たちの時代以前に曖昧なものについてもきちっとした明快な見解があってしかるべきなんですけども、なかったわけですね。この事柄自体がいわゆる新しい事柄であって、それが故に見解が分かれるわけなんですけども、基本はセーフティネットを広げるのが望ましいというのが基本スタンスとしてはあります。そのなかではっきりと白黒つけようとする人もあれば、そのまま唯一の神にゆだねるべきという人もあって、その姿勢自体についても本当は第三者がとやかく言うべきではないんですけども、そういった背景があるというご理解をいただければと思います。

じゃああの、樋口先生の質問は伝わってないですよ？

アキール：私の理解では、オーストラリアとか他の国から来てる肉は、国としてはちがうかもしれませんが、だいたい場合はそこでイスラミックセンターが認証出してるって私は理解しております。ですから私はその理解で、問題はありません。オーギービーフに

についてもイスラミックセンターが認証を出しているのであれば問題はないと思います。

ジャミール：同じようにアキールさんが言いましたんですね。私たちは買うときはマークが出ておりますので、ハラールって。たとえば鶏肉とか、ハラールショップの売ってる肉の方もマークが出ておりますので、マークが出ているものは一般のデパートにもあって、それを買うんですね。私たちは、そのマークが出てない場合は気を付けるんですね。それは買わないですね。

前野：大阪国際大の先生が問われたハラールビジネスと申しますか、産業自体というものに今後の可能性が大きいということをおっしゃいましたけども、これはムスリムの身内からはどつかれるかもしれないですけど、皆さんにも知っておいていただきたいのは、このハラール認証を扱うビジネスがムスリムにとって、それこそ利益をもたらす大きな商売、またそれに関わろうとする日本のムスリムの方々も、これがビジネスとして大きくなっていくこと自体はイスラーム的なスタンスから見たらおかしいと思います。それは本来、先ほど申し上げたように、背景としてハラールビジネス自体があったならばですね、私たちの時代になる以前にあってしかるべきなんです。イスラーム共同体すべての長たる、シンボリックな共同体の長があった時代に、ハラールマークというのが発明されてすべてそれがないとハラールではないとか、そういった形でハラールマークに権威がもたれてしかるべきなんですけども、それはなかった。ということは、新しい試み、営みであるわけですし、そうである以上本来的には、これはもちろん私の個人的な意見ではありますが、ムスリムがハラールビジネスと関わる上では、ムスリムの便宜のための営みであってしかるべきではないかと。なので当然そこには、シンボリックな多少の手数料などはとってほしいかもしれませんが、大きな利益目当てのビジネスになっては本末転倒なのではないかと思えるわけです。

会場(エルノービ?) : I just have one comment about the fatwa. [...] about fatwa don't speak about the halal if you can eat the halal meat for Muslim country but here is Japan, as in Islam we know [...] that is fixed and this is one [...] but regarding the fatwa it is different from country to country, it is very important to understand this. Japan is special case, Saudi Arabia is the case and Egypt is the case. Regarding the fatwa, all my brothers are here and others are here and we have to have one fatwa center here in Japan. I asked one professor, he is a vice-president of International Union of

Muslim Scholar, [...] Yusuf Qaradawi. He said to me if you ask me questions it is better to ask the one who is living in Japan, it is better to ask one living here, he may be has less knowledge than me but he will give you good fatwas because he knows the situation. We have to have one fatwa center regarding to halal and haram and all of us have to follow. If he says waste of the food is halal and you can't eat, you have to eat because he knows how can we give fatwas. We have to prepare ourselves to make this one fatwa center in Japan. It can consider Japanese situation and [...] Japanese circumstance, Japanese society, what is our need and [...] halal and haram in all our life because as I said in the morning halal and haram [...]. All things are halal and after this some things can be haram. Halal and haram cover all our life. Halal is not just regarding the food but it's regarding to every step in our life. We need this type of center. I hope, *Insha Allah*, this can give us encouragement to make this central center and [...] system, you have to complete. *Insha Allah*, Thank you so much

小島：申し訳ありませんが、唯一のハラールセンターを作れという話でそれに対して異論もムスリムの方にあるでしょうが、マグリブの時間が決まっていますので、そろそろ終わらないといけませんので。まああの、マグリブのお祈りの後戻ってこられる方も多いと思いますので、お話ししたいことがあれば個別にさせていただきたいと思います。

では、みなさまに感謝をこめて拍手をお願いいたします。

最後に共催の多民族・多世代社会研究所の店田から挨拶をさせていただきます。

店田：長時間にわたり、ありがとうございます。今回は「食を語る」ということで、これまでとはかなり視点が異なったものだと考えていました。今回食ということで見えてきたのは、何だったのか。ムスリムの方々、あるいはイスラームという視点から食を語っていただきましたが、聞いている非ムスリムである日本人の一人として、私たちの食べるという行為についてあるいは食ということについて、改めて考えるような機会にもなったんじゃないかなと思います。食べるということは信仰するということとイコールであるというような指摘もありました。一方で子供たちがハラールのものでしか食べられないけれども、喜んで友達と一緒に食事をするという、そういう食べるということを通じたコミュニケーションの形がありました。食べるということが人と人との関係であると同時に、食べるということは人と神との関係にもつながっているということも改めて確認した次第です。日本人の我々もお神酒という、お酒を神のお酒というふうと呼ぶ言葉があります。いろんな

宗教の人たち、ほとんどすべての人が食べることを通して人と人とは関係する、あるいは人と神とは関係する、そのような関係性を常に持っているのではないかなということについても改めて考えました。イスラームの視点からあるいはムスリムの方々の発言していただいたことが、きわめて特殊でイスラームに限ることではないような気もいたしました。

来年度またどのような形でここに集まれるかどうかはわかりませんが、開催されることはほぼ確実です。またぜひ参加していただいて、日本に住んでいるたくさんのムスリムの人たちがいるということ、さらに日本に住んでいるムスリムの人たちがこんな生活をしている、こんな考えをもっているということを日本の社会に対してこれからも発信していけるようなかたちでこの会議を続けていきたいと思っておりますので、ぜひ来年度も協力していただきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。また来年お会いできることを願っています。

第5回全国マシド（モスク）代表者会議の記録

2014年2月1日発行

編者 小島 宏・店田 廣文

発行所 早稲田大学アジア・ムスリム研究所
(早稲田大学重点領域研究機構プロジェクト研究所)
早稲田大学イスラーム地域研究機構
(NIHUプログラム イスラーム地域研究
早稲田大学中心拠点)

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地

早稲田大学 120-4 号館 3 階 311

TEL: 03-3203-4748 FAX: 03-3203-4840

E-mail: Asian-muslim@islam.waseda.ac.jp

URL: <http://www.kikou.waseda.ac.jp/ias/research/ams.html>
